

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

平成29年度

平成30年7月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	-----	1
2	位置	-----	1
3	土壌	-----	1
4	土地面積および利用区分	-----	1
5	機構	-----	2
6	職員	-----	2
7	建物	-----	4
8	新たに設置した主要施設および備品	-----	4
9	決算	-----	5

II 作況

1	気象経過	-----	6
2	当場の作況	-----	9

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	-----	22
	1) 麦類に関する試験	-----	22
	2) 馬鈴しょに関する試験	-----	22
	3) 牧草・飼料作物に関する試験	-----	22
	4) 栽培環境に関する試験	-----	23
	5) 病害虫に関する試験	-----	23
	6) 畑作物および野菜に関する試験	-----	24
	7) 地域支援活動	-----	25
2	技術普及室の活動	-----	25

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表		
	1) 研究論文	-----	27
	2) 口頭発表	-----	27
	3) 専門雑誌記事	-----	28
	4) 著編書・資料	-----	29
	5) 新聞記事	-----	30
2	普及事項		
	1) 普及奨励事項	-----	30
	2) 普及推進事項	-----	30
	3) 指導参考事項	-----	30
	4) 研究参考事項	-----	30
3	品種登録・特許申請	-----	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議	-----	31
2 各種委員会	-----	31
3 刊行印刷物	-----	35
4 広報活動	-----	35
5 見学受入れ	-----	37

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ	-----	38
2 講師派遣	-----	38
3 職員研修	-----	39
4 職場研修	-----	40
5 国際交流	-----	40

VII その他

1 技術体系化チーム	-----	41
2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	41
3 表彰・受賞	-----	41
4 行事	-----	42
5 自己点検への対応	-----	43
6 建物配置図	-----	44
7 圃場配置図	-----	45

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試元々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害科を病虫害科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

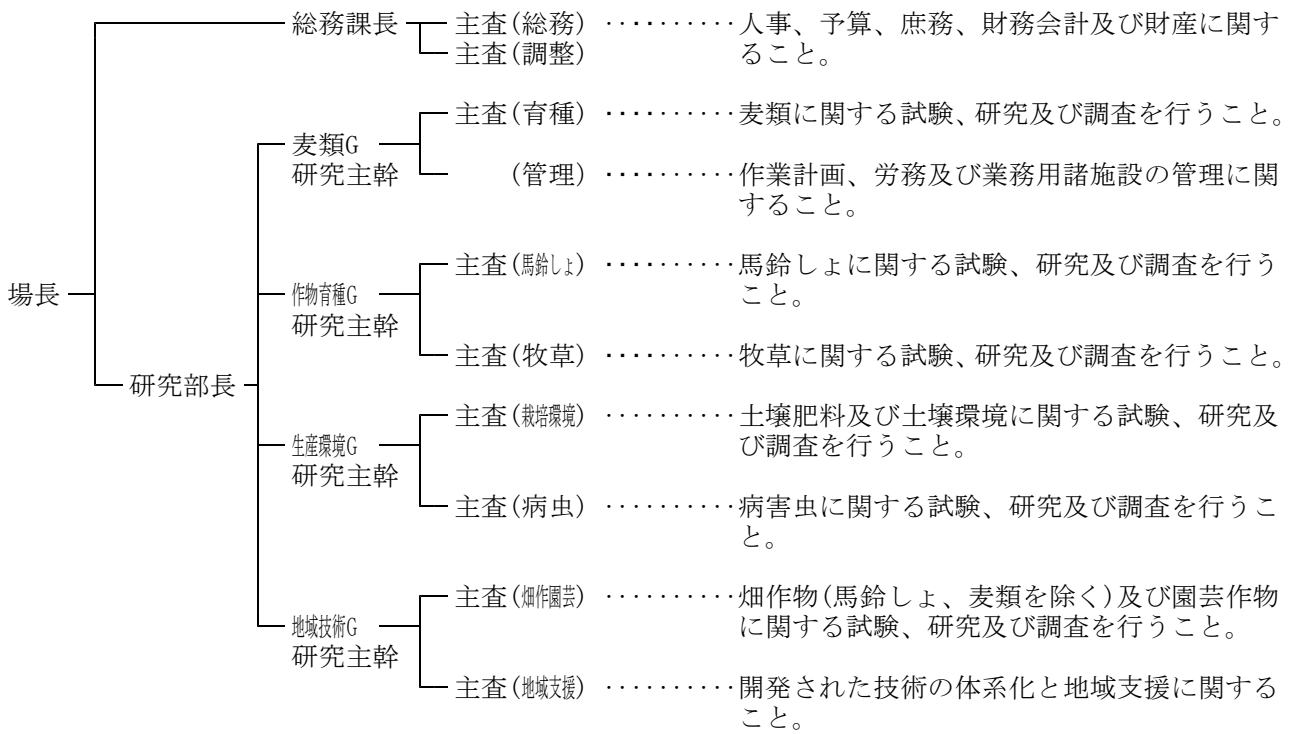
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁舎、建物敷地	118,564
公宅用地	44,151 (道財産)
道路、用排水路	42,383
山林	300,400
試験ほ場(畑)	709,705
" (隔離ほ場)	73,260
原野、その他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)
 上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(地域支援) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

平成30年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 G		作 物 育 種 G		生 産 環 境 G		地 域 技 術 G		総務課	合 計	技 術 普 及 室
				育 種	管 理	馬 鈴 しょ	牧 草	栽 培 環 境	病 虫	畑 作 園 芸	地 域 支 援			
研究職	1	1	4	6		4	3	3	3	3	1		29	
行政職					4							6	10	3
計	1	1	4	6	4	4	3	3	3	3	1	6	39	3

(2) 平成30年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	清水基滋	(作物育種G) 主任主査(牧草)	法人職員	藤井弘毅
総務課長	北海道職員	山井雅之	研究主任	〃	飯田憲司
主査(総務)	〃	立山裕之	研究主任	〃	足利和紀
主査(調整)	〃	佐々木賢			
専門主任	〃	杉本義則	(生産環境G)		
〃	〃	稲村浩至	研究主幹	法人職員	中辻敏朗
主任	法人職員	加藤和憲	主査(栽培環境)	〃	小野寺政行
<研究部>			研究主査	〃	木場稔信
研究部長	法人職員	島田尚典	研究主任	〃	唐木稔児
(麦類G)			主査(病虫)	〃	小野寺鶴将
研究主幹	法人職員	浅山聡	研究主査	〃	池谷美奈子
主査(育種)	〃	神野裕信	〃	〃	池田幸子
研究主任	〃	大西志全			
〃	〃	粕谷雅志	(地域技術G)		
〃	〃	足利奈奈	研究主幹	法人職員	田中静幸
研究職員	〃	其田達也	主査(地域支援)	〃	奥山昌隆
〃	〃	森田耕一	主査(畑作園芸)	〃	萩原誠司
専門主任	〃	伊藤幸雄	研究主査	〃	池谷聡裕
主任	〃	井口岳人	研究主任	〃	杉山
技師	〃	中出秀			
〃	〃	樫村信優			
(作物育種G)			(道技術普及室)		
研究主幹	法人職員	富田謙一	上席普及指導員	北海道職員	木俣栄
主査(馬鈴しょ)	〃	大波正寿	主任普及指導員	〃	山岸修
研究主査	〃	松永浩	主査(地域支援)	〃	佐々木康洋
〃	〃	青山聡			
研究主任	〃	品田博史			

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	清水基滋	29. 4. 1	中央農業試験場から
主任	杉本義則	29. 4. 1	胆振総合振興局から
研究主任	飯田憲司	29. 4. 1	畜産試験場から
〃	品田博史	29. 4. 1	十勝農業試験場から
研究職員	森田耕一	29. 4. 1	新規採用
(道技術普及室)	木俣栄	29. 4. 1	上川農業試験場技術普及室から
主査(地域支援)	佐々木康洋	29. 4. 1	空知普及センターから

(4) 転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究主任	来嶋正朋	29. 4. 1	上川農業試験場へ
〃	田中常喜	29. 4. 1	畜産試験場へ
主任	中山利彦	29. 4. 1	根室振興局へ
総務課長	山井雅之	30. 3. 31	退職
主任	加藤和憲	30. 3. 31	退職
(道技術普及室)	三宅俊秀	29. 4. 1	十勝農業改良普及センターへ
主任普及指導員	千石由利子	29. 4. 1	空知農業改良普及センターへ

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(m ²)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫(馬鈴しょ)	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
カラーレーザープリンター	キヤノン LBP712Ci	136,080	麦 類 G
試験用中型脱穀機	藤森鉄工場 CR-24	1,001,160	麦 類 G
試験用中型脱穀機	藤森鉄工場 CR-24	1,001,160	麦 類 G
試験用小型唐箕	藤森鉄工場 T-20	653,400	麦 類 G
試験用小型唐箕	藤森鉄工場 T-20	653,400	麦 類 G
土壤水分センサセット	Delta-T SM150-KIT	105,840	地域技術G
原動機付自転車	ホンダ スーパーカブ50	204,120	麦 類 G
電動アシスト三輪自転車	ミムゴ MG-TRM20EB	156,600	麦 類 G
ウイレー粉碎機	藤原製作所 WSX-140	852,986	生産環境G
人工気象器	日本医科機械製作所 LH-411PFQPT-SP	2,624,400	生産環境G
雪ふみローラー	サンヨー工業 スタンド ² 箇所 タイヤ8本式	400,000	生産環境G
試験圃場用鹿防除柵	ガラガー	496,800	作物育種G
pHメーター	東亜DKK HM-41X	135,000	生産環境G
粉体白度計	ケット科学研究所 C-130	466,560	作物育種G
土壤用高速遠心機	コクサン H-1400PF	4,104,000	生産環境G
土壤粉碎ふるい分け装置一式	富士平工業 SSM-3	615,000	生産環境G
	マキタ M442		
畦草刈機	オーレック SP851A	254,448	麦 類 G
ロール式播種機	アグリテクノ矢崎 APH	475,200	地域技術G
汎用管理機	ヤンマー YK105MK	388,800	麦 類 G
デスクトップパソコン	富士通 ESPRIMO WD1/B2	144,720	生産環境G

9 決 算 (支出額)

(単位：円)

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	400,000	400,000	0	1 課題
重 点 研 究 費	2,665,280	2,665,280	0	
職 員 研 究 奨 励 費	970,000	970,000	0	
経 常 研 究 費	14,171,000	14,171,000	0	
研 究 開 発 推 進 費	2,800,000	2,800,000	0	
技 術 普 及 指 導 費	224,200	224,200	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	6,961,680	6,961,680	0	
維持管理経費(研究)	725,000	725,000	0	
維持管理経費(一般)	25,825,000	25,753,879	71,121	
研究関連維持管理経費	350,000	350,000	0	
知的財産経費	1,000,000	1,000,000	0	
運 営 経 費	34,521,400	34,485,410	35,990	
共 同 研 究 費	8,100,000	8,100,000	0	
国庫受託研究費	32,946,000	32,940,924	5,076	
道受託研究費	5,590,000	5,531,808	58,192	
その他受託研究費	61,547,000	61,533,783	13,217	
施設整備費(繰越積立金)	7,620,000	7,618,760	1,240	
合 計	206,416,560	206,231,724	184,836	

※ 人件費(研究職員費・派遣職員費・準職員費・契約職員費)を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬・中旬がともに平年よりやや高く、下旬はやや低かった。月平均気温は5.0℃で平年よりやや高かった(+0.6℃)。降水量は上旬がゼロで、中旬は平年より極めて多く、下旬はやや少なく、月合計は36.5mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬・中旬・下旬ともに平年並で、月合計は205.5時間で平年並であった。

5月：平均気温は上旬・中旬・下旬ともに平年より高かった。月平均気温は12.1℃で平年より高かった(+1.8℃)。降水量は上旬が平年よりやや少なく、中旬はやや多く、下旬は多く、月合計は72.5mmで平年よりやや多かった。日照時間は上旬が平年より多く、中旬は平年並で、下旬はやや少なく、月合計は195.7時間で平年並であった。

6月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬は低く、下旬は平年並であった。月平均気温は13.6℃で平年より低かった(-1.7℃)。降水量は上旬・中旬・下旬ともに平年より多く、月合計は124.0mmで平年より多かった。日照時間は上旬が平年よりやや少なく、中旬は多く、下旬はやや少なく、月合計は156.8時間で平年並であった。

7月：平均気温は上旬が平年より高く、中旬は極めて高く、下旬はやや高かった。月平均気温は20.9℃で平年より高かった(+2.1℃)。降水量は上旬が平年並で、中旬は極めて多く、下旬は少なく、月合計は140.0mmで平年よりやや多かった。日照時間は上旬・中旬がともに平年よりやや多く、下旬は平年並で、月合計は181.4時間で平年並であった。

8月：平均気温は上旬・中旬がともに平年より極めて低く、下旬は平年並であった。月平均気温は18.3℃で平年より低かった(-1.8℃)。降水量は上旬・中旬・下旬ともに平年より少なく、月合計は23.5mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年より少なく、中旬はやや少なく、下旬は平年並で、月合計は84.8時間で平年より少なかった。

9月：平均気温は上旬・中旬がともに平年より低く、下旬は平年並であった。月平均気温は14.4℃で平年よりやや低かった(-1.5℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬は極めて多く、下旬はやや少なく、月合計は116.5mmで平年並であった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬・下旬はともにやや少なく、月合計は138.8時間で平年並で

あった。

10月：平均気温は上旬が平年並で、中旬は極めて低く、下旬は平年並であった。月平均気温は7.3℃で平年よりやや低かった(-1.1℃)。降水量は上旬がゼロで、中旬は少なく、下旬は極めて多く、月合計は51.5mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬・中旬・下旬ともに平年並で、月合計は165.8時間で平年並であった。

11月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬はやや低かった。中旬までの平均気温は2.3℃で平年並であった(-0.5℃)。降水量は上旬が平年よりやや少なく、中旬は平年並で、中旬までの合計は39.0mmで平年並であった。日照時間は上旬・中旬ともに平年よりやや多く、中旬までの合計は104.0時間で平年よりやや多かった。

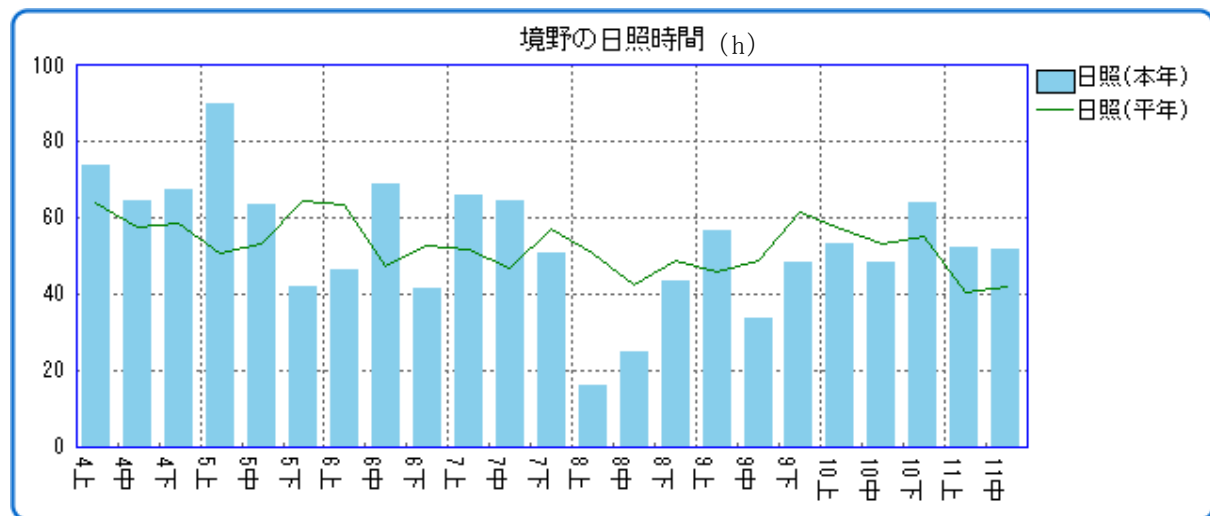
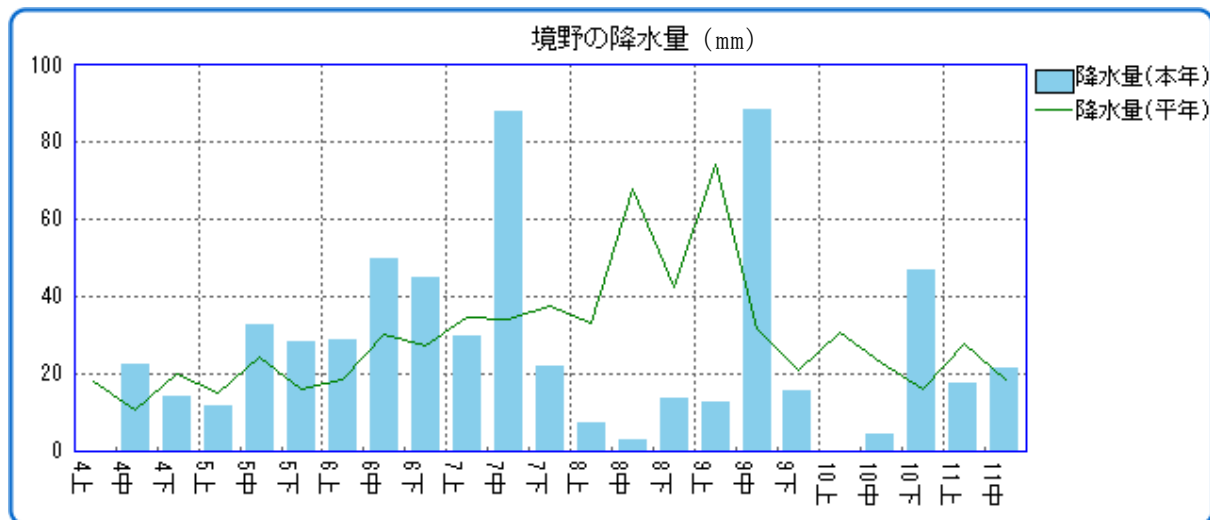
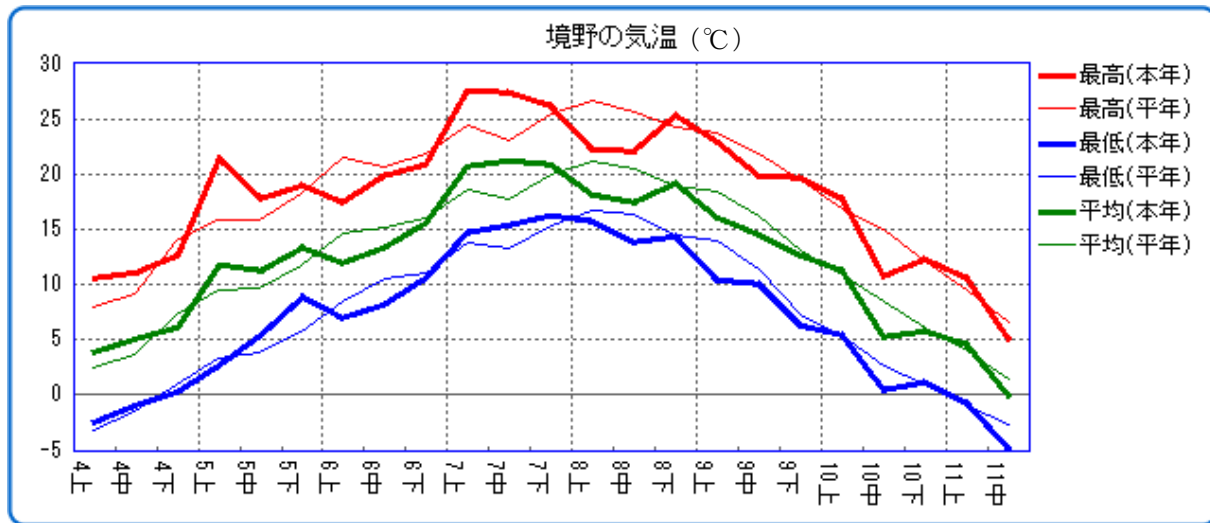
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月は高く、6月は低く、7月は高く、8月は低く、9月はやや低かった。この期間の日平均気温の積算値は2433℃で平年並であった(平年差-29℃、平年比99%)。

降水量：5月はやや多く、6月は多く、7月はやや多く、8月は少なく、9月は平年並であった。この期間の降水量の積算は477mmで平年並であった(平年差-29mm、平年比94%)。

日照時間：5月・6月・7月は平年並で、8月は少なく、9月は平年並であった。この期間の日照時間の積算は758時間で平年並であった(平年差-27時間、平年比97%)。

(2) 気温、降水量および日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
平成29年 4月	上旬	3.9	2.4	1.5	10.6	7.9	2.7	-2.4	-3.2	0.8	0.0	17.9	-17.9	73.8	63.9	9.9
	中旬	5.1	3.7	1.4	11.1	9.2	1.9	-1.0	-1.4	0.4	22.5	10.4	12.1	64.4	57.8	6.6
	下旬	6.1	7.2	-1.1	12.6	14.0	-1.4	0.2	0.9	-0.7	14.0	20.0	-6.0	67.3	58.7	8.6
5月	上旬	11.7	9.5	2.2	21.3	15.9	5.4	2.6	3.4	-0.8	11.5	14.9	-3.4	90.3	50.6	39.7
	中旬	11.2	9.6	1.6	17.8	15.8	2.0	5.5	3.8	1.7	32.5	24.1	8.4	63.4	53.3	10.1
	下旬	13.3	11.7	1.6	18.9	18.2	0.7	8.9	5.7	3.2	28.5	16.1	12.4	42.0	64.4	-22.4
6月	上旬	11.9	14.7	-2.8	17.4	21.5	-4.1	6.9	8.5	-1.6	29.0	18.3	10.7	46.5	63.6	-17.1
	中旬	13.4	15.2	-1.8	19.8	20.6	-0.8	8.1	10.6	-2.5	50.0	30.0	20.0	69.0	47.1	21.9
	下旬	15.6	16.0	-0.4	20.8	21.8	-1.0	10.6	11.1	-0.5	45.0	27.2	17.8	41.3	52.9	-11.6
7月	上旬	20.7	18.6	2.1	27.6	24.4	3.2	14.7	13.8	0.9	30.0	34.4	-4.4	65.9	51.5	14.4
	中旬	21.2	17.8	3.4	27.3	23.1	4.2	15.4	13.3	2.1	88.0	33.9	54.1	64.7	46.9	17.8
	下旬	20.8	20.0	0.8	26.2	25.5	0.7	16.2	15.3	0.9	22.0	37.4	-15.4	50.8	57.0	-6.2
8月	上旬	18.2	21.2	-3.0	22.2	26.6	-4.4	15.8	16.7	-0.9	7.0	32.9	-25.9	16.0	50.5	-34.5
	中旬	17.5	20.4	-2.9	22.1	25.6	-3.5	13.8	16.3	-2.5	3.0	67.7	-64.7	25.1	42.3	-17.2
	下旬	19.2	18.9	0.3	25.4	24.2	1.2	14.3	14.4	-0.1	13.5	42.6	-29.1	43.7	48.8	-5.1
9月	上旬	16.1	18.5	-2.4	22.9	23.8	-0.9	10.4	14.0	-3.6	12.5	74.1	-61.6	56.8	45.6	11.2
	中旬	14.5	16.2	-1.7	19.9	21.9	-2.0	10.1	11.3	-1.2	88.5	31.6	56.9	33.7	48.8	-15.1
	下旬	12.7	13.1	-0.4	19.7	19.4	0.3	6.2	7.3	-1.1	15.5	21.0	-5.5	48.3	61.5	-13.2
10月	上旬	11.2	10.9	0.3	17.7	16.9	0.8	5.5	5.3	0.2	0.0	30.5	-30.5	53.2	57.2	-4.0
	中旬	5.2	8.4	-3.2	10.8	15.0	-4.2	0.4	2.6	-2.2	4.5	22.8	-18.3	48.4	53.0	-4.6
	下旬	5.7	6.1	-0.4	12.2	12.1	0.1	1.1	0.9	0.2	47.0	15.7	31.3	64.2	55.3	8.9
11月	上旬	4.6	4.0	0.6	10.6	9.5	1.1	-0.8	-0.9	0.1	17.5	27.7	-10.2	52.1	40.2	11.9
	中旬	0.0	1.5	-1.5	5.1	6.5	-1.4	-4.8	-2.7	-2.1	21.5	18.6	2.9	51.9	41.7	10.2
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
4月		5.0	4.4	0.6	11.4	10.4	1.0	-1.1	-1.2	0.1	36.5	48.3	-11.8	205.5	180.4	25.1
5月		12.1	10.3	1.8	19.3	16.7	2.6	5.8	4.3	1.5	72.5	55.1	17.4	195.7	168.3	27.4
6月		13.6	15.3	-1.7	19.3	21.3	-2.0	8.5	10.1	-1.6	124.0	75.5	48.5	156.8	163.6	-6.8
7月		20.9	18.8	2.1	27.0	24.4	2.6	15.5	14.2	1.3	140.0	105.7	34.3	181.4	155.4	26.0
8月		18.3	20.1	-1.8	23.3	25.4	-2.1	14.6	15.8	-1.2	23.5	143.2	-119.7	84.8	141.6	-56.8
9月		14.4	15.9	-1.5	20.8	21.7	-0.9	8.9	10.9	-2.0	116.5	126.7	-10.2	138.8	155.9	-17.1
10月		7.3	8.4	-1.1	13.5	14.6	-1.1	2.3	2.9	-0.6	51.5	69.0	-17.5	165.8	165.5	0.3
11月(中旬まで)		2.3	2.8	-0.5	7.9	8.0	-0.1	-2.8	-1.8	-1.0	39.0	46.3	-7.3	104.0	81.9	22.1

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	H28.10.5	H28.12.6	H29.4.7	123	H29.4.23	H29.4.25	H29.5.9	H29.10.17	160	H29.10.23
平年	10.13	12.5	4.10	128	5.4	4.28	5.7	10.12	156	11.1
比較	-8	1	-3	-5	-11	-3	2	5	4	-9

期間	項目	平均気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
	5月上旬 ～ 9月下旬	本年	2433	477
平年		2462	506	785
比較		-29	-29	-27

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。平年値は前10か年の平均値である。

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦 (平成28年9月播種)

作況：不良

事由：播種は平年より2日早い9月15日に行った。出芽期は平年より2日早い9月23日で、出芽は良好であった。出芽後の平均気温はほぼ平年並に経過したが、10月下旬～11月上旬は平年より極めて低く、11月上旬～中旬に2週間程度の積雪があり、生育は停滞した。越冬前(11月20日)の草丈は平年並、茎数は平年を下回ったが、越冬に必要な生育量は確保した。根雪始は平年より1日遅い12月6日、融雪期は平年より3日早い4月7日で、根雪期間は平年より5日短かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期が観測点より14日早い3月24日で、雪腐病の発生は少なかった。

融雪期以降、平均気温は5月まで高めに経過し生育が進んだが、6月上旬は極めて低かったため、出穂期は平年より1日早い6月8日であった。6月中～下旬の平均気温は平年並から低かったが、7月上～中旬は高く経過し、登熟が促進されたことから成熟期は7月21日で平年より4日早く、登熟期間は平年より3日短かった。稈長、穂長は平年よりやや短く、穂数は少なかった。倒伏は未発生であった。リットル重は平年並であったが、千粒重は平年を下回った。穂数が少なかったことと千粒重が小さかったことから、子実重は平年比93%であった。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成28年月.日)	9.15	9.17	△2
出芽期 (平成28年月.日)	9.23	9.25	△2
出穂期 (平成29年月.日)	6.8	6.9	△1
成熟期 (平成29年月.日)	7.21	7.25	△4
草丈(cm) (平成28年11月20日)	18.1	18.5	△0.4
草丈(cm) (平成29年5月20日)	39.9	37.4	2.5
草丈(cm) (平成29年6月20日)	91.9	91.2	0.7
茎数(本/m ²) (平成28年11月20日)	1039	1258	△219
茎数(本/m ²) (平成29年5月20日)	1275	1486	△211
茎数(本/m ²) (平成29年6月20日)	658	758	△100
稈長(cm) (成熟期)	81	84	△3
穂長(cm) (成熟期)	8.1	8.8	△0.7
穂数(本/m ²) (成熟期)	644	735	△91
子実重(kg/10a)	675	722	△47
同上平年比 (%)	93	100	△7
リットル重 (g)	799	800	△1
千粒重 (g)	36.6	38.8	△2.2
品質 (検査等級)	1	1	-

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、27年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 秋まき小麦 (平成29年9月播種)

作 況 : やや不良

事 由 : 9月中旬は降水量が多く畑の耕起が遅れたことから、播種は平年より5日遅い9月22日に行った。出芽期は平年より5日遅い9月30日であった。出芽後、10月中旬の平均気温が

平年より極めて低かったため、越冬前の草丈、茎数は平年を下回った。

以上のことから、目下の作況は「やや不良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成29年月.日)	9.22	9.17	5
出芽期 (平成29年月.日)	9.30	9.25	5
草丈 (cm) (平成29年11月20日)	12.1	18.5	△6.4
茎数 (本/m ²) (平成29年11月20日)	840	1258	△418

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、29年(最凶)を除く5か年の平均。

3) 春まき小麦

作 況：不良

事 由：調査圃場は融雪剤散布により3月26日に融雪期となった。播種期は平年並の4月17日であった。播種後の平均気温は、4月下旬が平年よりやや低かったが、5月上旬は高く、出芽期は平年並から1日遅かった。出芽後の5月上中旬の気温は高く生育は順調で、草丈は平年をやや上回り、茎数はやや少なかった。6月上中旬の気温が平年より低く経過したことから、出穂期は平年より3～4日遅かった。開花後の7月上中旬は降水量が平年並から多く、気温も高かったことから赤かび病の発生が目

立った。また、7月16日の大雨によって両品種とも倒伏程度は甚となった。稈長、穂長は平年並で、穂数は多かった。7月の気温が高かったことから登熟は進み、成熟期は平年並から1日遅かった。このため、登熟期間は平年より3日短くなった。早期での倒伏や登熟期間が短くなった影響から、子実重は平年比64～65%と低収で、リットル重と千粒重は平年を大きく下回った。検査等級は1等であった。以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	春よ恋			はるきりり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	4.17	4.17	0	4.17	4.17	0	
出芽期 (月・日)	5.3	5.2	1	5.3	5.3	0	
出穂期 (月・日)	6.26	6.23	3	6.25	6.21	4	
成熟期 (月・日)	8.5	8.5	0	8.7	8.6	1	
草丈(cm)	(5月20日)	16.8	15.5	1.3	18.2	15.7	2.5
	(6月20日)	73.1	69.4	3.7	70.4	69.3	1.1
茎数(本/m ²)	(5月20日)	392	457	△ 65	412	435	△ 23
	(6月20日)	758	822	△ 64	759	813	△ 54
稈長(cm) (7月20日)	93	97	△ 4	90	94	△ 4	
穂長(cm) (7月20日)	7.9	8.0	△ 0.1	7.5	7.4	0.1	
穂数(本/m ²) (7月20日)	799	595	204	803	609	194	
子実重(kg/10a)	335	518	△ 183	333	517	△ 184	
同上平年比 (%)	65	100	△ 35	64	100	△ 36	
リットル重 (g)	731	806	△ 75	741	805	△ 64	
千粒重 (g)	31.9	39.4	△ 7.5	34.9	41.4	△ 6.5	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、27年(最豊)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし (サイレージ用)

作 況 : やや良

事 由 : 播種期は平年より2日早い5月15日で、出芽期も平年より2日早い5月29日であった。出芽後、6月上・中旬の気温が平年より低かったものの、7月の気温が全般に平年より高く推移したため、開花期は平年と同日で、抽糸期は平年より1日遅かった。抽糸期後は8月下旬を除いて気温が平年より低く推移したが、8月20日の草丈と葉数および9月20日の稈長は

いずれも平年並であった。収穫期は平年より1日遅い9月25日であった。収穫時の子実の熟度は黄熟初期と平年並で、総体の乾物率は平年より低かった。乾物茎葉重は平年より多く、乾物雌穂重は平年並で、乾物総重および推定TDN収量はそれぞれ平年比106%、105%と平年よりやや多かった。

以上のことから、本年の作況は「やや良」である。

調査項目	チベリウス			
	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	5.15	5.17	△2	
出芽期 (月・日)	5.29	5.31	△2	
開花期 (月・日)	8.1	8.1	0	
抽糸期 (月・日)	8.1	7.31	1	
収穫期 (月・日)	9.25	9.24	1	
収穫時の熟度	黄熟初期	黄熟初期		
草丈 (cm)	(6月20日)	24.1	31.3	△7.2
	(7月20日)	182.6	181.4	1.2
	(8月20日)	322.6	306.9	15.7
稈長 (cm)	(9月20日)	283	272	11
葉数 (枚)	(6月20日)	4.4	4.8	△0.4
	(7月20日)	13.2	12.6	0.6
	(8月20日)	15.0	14.9	0.1
生総重 (kg/10a)	7609	6567	1042	
乾物茎葉重 (kg/10a)	1055	933	122	
乾物雌穂重 (kg/10a)	1042	1047	△5	
乾物総重 (kg/10a)	2096	1979	117	
同上平年比 (%)	106	100	6	
推定TDN収量 (kg/10a)	1499	1432	67	
同上平年比 (%)	105	100	5	
総体の乾物率 (%)	27.6	30.2	△2.6	
乾雌穂重割合 (%)	49.7	52.9	△3.2	
有効雌穂割合 (%)	100.0	99.3	0.7	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 推定TDN収量 = 乾物茎葉重 × 0.582 + 乾物雌穂重 × 0.850。

5) 大豆

作況：やや不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。出芽後の低温で生育は停滞したが、6月下旬以降の気温が平年並から高く経過したため生育の遅れはやや回復し、開花始は平年より1日遅い7月18日であった。8月上～中旬が低温寡照、9月上旬以降も低温で経過したことから、成熟期は平年より1日遅い9月24日で、主茎長、主茎節数、分枝数とも平年をやや下

回った。開花期間である7月下旬の気温が比較的高かったことから、着莢数は平年をやや上回った。一莢内粒数は平年をやや上回ったが、百粒重が平年を大きく下回ったため、子実重は平年比95%とやや低収であった。品質は平年をやや上回った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目		ユキホマレ		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.19	5.23	△ 4
出芽期	(月.日)	6.1	6.5	△ 4
開花始	(月.日)	7.18	7.17	1
成熟期	(月.日)	9.24	9.23	1
主茎長(cm)	(6月20日)	10.0	12.1	△ 2.1
	(7月20日)	51.2	56.7	△ 5.5
	(8月20日)	66.8	72.1	△ 5.3
	(9月20日)	67.1	73.2	△ 6.1
	(成熟期)	67.7	72.9	△ 5.2
本葉数(枚)	(6月20日)	0.2	1.3	△ 1.1
	(7月20日)	8.3	7.7	0.6
主茎節数	(8月20日)	10.6	11.3	△ 0.7
	(9月20日)	10.8	11.3	△ 0.5
	(成熟期)	10.9	11.2	△ 0.3
分枝数(本/株)	(7月20日)	4.4	5.1	△ 0.7
	(8月20日)	4.8	5.7	△ 0.9
	(9月20日)	4.3	5.5	△ 1.2
	(成熟期)	4.5	5.3	△ 0.8
着莢数(個/株)	(8月20日)	83.6	78.2	5.4
	(9月20日)	77.3	68.6	8.7
	(成熟期)	73.4	69.3	4.1
一莢内粒数		1.97	1.87	0.10
子実重(kg/10a)		357	376	△ 19
同上平年比(%)		95	100	△ 5
百粒重(g)		30.3	36.2	△ 5.9
屑粒率(%)		1.4	0.9	0.5
品質(検査等級)		1	2上	—

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

6) 小豆

作況：不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。6月上中旬の気温が低く経過したため出芽期は平年並で、主茎長、本葉数とも平年を下回って推移した。6月下旬以降の気温が平年並から高く経過したため生育はやや回復し、開花始は「サホロショウズ」で平年並、「エリモショウズ」では平年より2日早かった。しかし、8月上～中旬が低温寡照に経過し、開花・着莢の進行は遅れた。9月上旬以降も低温

で経過したため登熟は遅れ、成熟期は平年と比べ「サホロショウズ」で15日、「エリモショウズ」で12日遅かった。両品種ともに一莢内粒数、百粒重は平年を上回ったが、着莢数が平年をかなり下回り、子実重は「サホロショウズ」で平年比79%、「エリモショウズ」で同87%と低収であった。品質は両品種とも平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	サホロショウズ			エリモショウズ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.19	5.23	△ 4	5.19	5.23	△ 4	
出芽期 (月.日)	6. 8	6. 7	1	6. 8	6. 8	0	
開花始 (月.日)	7.21	7.21	0	7.22	7.24	△ 2	
成熟期 (月.日)	9.29	9.14	15	10. 2	9.20	12	
主茎長 (cm)	(6月20日)	3.4	4.2	△ 0.8	3.6	4.4	△ 0.8
	(7月20日)	17.7	23.6	△ 5.9	19.5	21.7	△ 2.2
	(8月20日)	74.3	82.3	△ 8.0	67.3	72.7	△ 5.4
	(9月20日)	71.2	91.9	△20.7	63.1	79.4	△16.3
	(成熟期)	71.6	93.7	△22.1	67.0	79.4	△12.4
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	0.8	△ 0.6	0.1	0.8	△ 0.7
	(7月20日)	7.4	7.1	0.3	8.2	7.2	1.0
主茎節数	(8月20日)	13.5	13.8	△ 0.3	14.7	14.3	0.4
	(9月20日)	12.2	14.3	△ 2.1	12.8	14.7	△ 1.9
	(成熟期)	12.5	14.4	△ 1.9	13.4	14.6	△ 1.2
分枝数 (本/株)	(7月20日)	1.5	3.1	△ 1.6	1.2	3.1	△ 1.9
	(8月20日)	3.9	4.7	△ 0.8	4.3	4.8	△ 0.5
	(9月20日)	2.8	4.4	△ 1.6	2.3	4.4	△ 2.1
	(成熟期)	2.3	4.4	△ 2.1	2.8	4.4	△ 1.6
着莢数 (個/株)	(8月20日)	29.4	59.6	△30.2	30.8	62.2	△31.4
	(9月20日)	44.2	59.6	△15.4	45.5	59.6	△14.1
	(成熟期)	40.7	58.9	△18.2	44.7	60.3	△15.6
一莢内粒数	6.65	5.91	0.74	6.68	6.48	0.20	
子実重 (kg/10a)	312	395	△ 83	351	405	△ 54	
同上平年比 (%)	79	100	△ 21	87	100	△ 13	
百粒重 (g)	16.6	14.3	2.3	15.6	13.4	2.2	
屑粒率 (%)	8.9	1.9	7.0	6.0	1.9	4.1	
品質 (検査等級)	4中	3下	—	4中	3中	—	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜豆

作況：やや不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。出芽後の低温で生育は停滞したが、6月下旬以降の気温が平年並から高く経過したため生育は回復し、開花始は平年並の7月8日であった。8月上～中旬が低温寡照に経過し、9月上旬も低温であったため、成熟期は平年よ

り9日遅い9月9日であった。百粒重は平年を上回ったが、着莢数および一莢内粒数が平年を下回ったため、子実重は平年比94%とやや低収であった。屑粒率は平年より高く、品質は平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目		大正金時		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.19	5.23	△ 4
出芽期	(月.日)	6. 1	6. 6	△ 5
開花始	(月.日)	7. 8	7. 8	0
成熟期	(月.日)	9. 7	8.29	9
草丈 (cm)	(6月20日)	11.6	11.0	0.6
	(7月20日)	37.5	47.1	△ 9.6
	(8月20日)	47.8	50.3	△ 2.5
	(9月20日)	-	-	-
	(成熟期)	49.4	50.1	△ 0.7
本葉数(枚)	(6月20日)	0.3	1.3	△ 1.0
	(7月20日)	3.6	3.3	0.3
主莖節数	(8月20日)	5.3	5.2	0.1
	(9月20日)	-	-	-
	(成熟期)	5.2	5.2	0.0
分枝数(本/株)	(7月20日)	6.5	5.3	1.2
	(8月20日)	6.0	5.0	1.0
	(9月20日)	-	-	-
	(成熟期)	6.1	4.9	1.2
着莢数(個/株)	(8月20日)	17.1	22.0	△ 4.9
	(9月20日)	-	-	-
	(成熟期)	17.2	21.0	△ 3.8
一莢内粒数		2.68	2.94	△0.26
子実重(kg/10a)		310	329	△ 19
同上平年比 (%)		94	100	△ 6
百粒重 (g)		77.7	68.8	8.9
屑粒率 (%)		16.2	7.3	8.9
品質 (検査等級)		3下	3上	-

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

3) 屑粒：[下屑粒]+[色流れ粒]。

4) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

8) ばれいしょ

作 況：平年並

事 由：植え付けは平年より3日早い5月9日に行った。5月中・下旬の気温が高かったことから、萌芽期は平年より3~4日早かったが、6月上・中旬の低温により、開花始はほぼ平年並であった。開花後の7月上・中旬は高温で降水量も多かったことから、茎長は両品種ともに平年よりやや長くなった。

「男爵薯」では、8月上旬より気温が低く経過したことから、枯ちょう期は平年より8日遅い9月7日であった。塊茎の肥大が進ま

ず、上いも平均重は平年より軽く、上いも重は平年比96%であった。

「コナフブキ」では、枯ちょう期は平年より4日遅い10月8日であった。上いも数は平年よりやや多かったものの、上いも平均重が平年より10g軽く、上いも重は平年比98%であった。8月上旬から9月上旬まで降水量が少なかったことから、でん粉価は平年より高く、でん粉重は平年比103%であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目	男爵薯			コナフブキ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
植付期 (月.日)	5.9	5.12	△3	5.9	5.12	△3	
萌芽期 (月.日)	5.29	6.2	△4	5.31	6.3	△3	
開花始 (月.日)	6.29	6.30	△1	6.30	6.30	0	
枯ちょう期 (月.日)	9.7	8.30	8	10.8	10.4	4	
茎長(cm)	(6月20日)	21.6	20.7	0.9	16.9	21.7	△4.8
	(7月20日)	57	51	6	83	70	13
	(8月20日)	57	51	6	98	79	19
茎数(本/株)	(6月20日)	4.3	3.6	0.7	3.0	3.2	△0.2
	(7月20日)	4.8	3.9	0.9	3.1	3.5	△0.4
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	4338	4558	△220	3593	3819	△226
	(9月20日)	4423	4613	△190	4600	4797	△197
でん粉価(%)	(8月20日)	15.6	15.4	0.2	21.4	21.1	0.3
	(9月20日)	16.5	14.9	1.6	23.9	22.0	1.9
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	—	—	—	1054	1011	43
上いも数(個/株)	10.8	10.6	0.2	11.3	10.5	0.8	
上いも平均重(g)	92	99	△7	98	108	△10	
上いも重(kg/10a)	4423	4613	△190	4901	5010	△109	
同上平年比(%)	96	100	△4	98	100	△2	
でん粉価(%)	16.5	14.9	1.6	23.1	22.1	1.0	
でん粉重(kg/10a)	—	—	—	1085	1058	27	
同上平年比(%)	—	—	—	103	100	3	

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、24年(最豊)を除く5か年の平均。

9) てんさい

作 況：平年並

事 由：移植栽培での播種は、平年並の3月22日に行った。育苗期間中は平均気温が平年より高めに推移したため、苗の生育は平年よりやや旺盛であった。移植は平年より4日早い5月2日に行った。移植の前後に降雨があったため活着は順調であった。また直播栽培での播種は、平年より4日早い5月2日に行った。以後気温が高く土壌も適湿であったので、出芽は順調であった。

5月から7月までは、気温が平年に比べ大きく上下したが、生育への影響は相殺され、7月20日までの生育はほぼ平年並であった。8月上・中旬は、気温が平年より低く、降水量、日照時

間が少なかったため、生育は停滞し、8月20日における茎葉重、根重、根周は平年を下回った。8月下旬以降も低温傾向が続いたため、根重は回復せず平年を下回る傾向が続いた。一方、根中糖分は、8月以降の低温、特に最低気温が低かった影響で、順調に上昇した。

収穫は、平年より2日早い10月18日に行った。根重は平年を下回った（平年比約90%）が、根中糖分は平年を上回った（平年比約110%）。このため、糖量は平年並であった（平年比約100%）。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表 その1

調査項目	移植						直播			
	リッカ			アマホマレ			リッカ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	3.22	3.22	0	3.22	3.22	0	5.2	5.6	△ 4	
移植期 (月・日)	5.2	5.6	△ 4	5.2	5.6	△ 4	-	-	-	
出芽期 (月・日)	-	-	-	-	-	-	5.14	5.17	△ 3	
収穫期 (月・日)	10.18	10.20	△ 2	10.18	10.20	△ 2	10.18	10.20	△ 2	
草丈(cm)	(5月20日)	6.6	6.2	0.4	6.1	6.0	0.1	-	-	-
	(6月20日)	27.9	25.5	2.4	27.6	27.4	0.2	13.9	13.2	0.7
	(7月20日)	55.6	55.3	0.3	53.7	53.4	0.3	51.9	47.5	4.4
	(8月20日)	58.6	63.2	△ 4.6	59.0	58.3	0.7	61.3	63.2	△ 1.9
	(9月20日)	59.1	60.6	△ 1.5	59.9	59.5	0.4	64.4	63.2	1.2
生葉数(枚)	(5月20日)	6.1	4.7	1.4	5.3	4.1	1.2	-	-	-
	(6月20日)	10.1	11.4	△ 1.3	10.0	11.8	△ 1.8	8.6	7.0	1.6
	(7月20日)	20.4	18.7	1.7	22.4	20.3	2.1	16.6	15.0	1.6
	(8月20日)	23.2	23.0	0.2	25.1	26.3	△ 1.2	21.4	21.1	0.3
	(9月20日)	24.5	25.1	△ 0.6	27.8	28.1	△ 0.3	23.3	21.4	1.9
茎葉重(g/個体)	(6月20日)	97	93	4	91	105	△ 14	13	12	1
	(7月20日)	554	575	△ 21	577	598	△ 21	347	364	△ 17
	(8月20日)	650	767	△ 117	753	881	△ 128	616	793	△ 177
	(9月20日)	662	693	△ 31	741	800	△ 59	721	719	2
根重(g/個体)	(6月20日)	18	15	3	21	23	△ 2	1	1	0
	(7月20日)	295	270	25	275	290	△ 15	115	104	11
	(8月20日)	625	791	△ 166	641	820	△ 179	445	553	△ 108
	(9月20日)	1040	1160	△ 120	939	1171	△ 232	861	906	△ 45
根周(cm)	(7月20日)	22.7	22.6	0.1	22.9	23.6	△ 0.7	15.8	16.2	△ 0.4
	(8月20日)	29.8	33.1	△ 3.3	32.2	34.6	△ 2.4	25.3	28.5	△ 3.2
	(9月20日)	35.3	35.7	△ 0.4	36.4	37.9	△ 1.5	32.0	33.6	△ 1.6
根中糖分(%)	(9月20日)	16.65	14.92	1.73	17.24	15.32	1.92	15.83	14.42	1.41

表 その2

調査項目	移植						直播		
	リッカ			アマホマレ			リッカ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
茎葉重 (kg/10a) (収穫期)	3603	3811	△ 208	4690	4486	204	3950	4541	△ 591
根重 (kg/10a) (収穫期)	7267	8073	△ 806	6730	7522	△ 792	5977	6599	△ 622
同上平年比(%)	90	100	△ 10	89	100	△ 11	91	100	△ 9
根中糖分(%)	18.47	16.71	1.76	19.44	17.80	1.64	18.65	17.00	1.65
同上平年比(%)	111	100	11	109	100	9	110	100	10
糖量(kg/10a)	1342	1345	△ 3	1308	1331	△ 23	1115	1119	△ 4
同上平年比(%)	100	100	0	98	100	△ 2	100	100	0

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、平成26年(最豊)を除く5か年の平均。

10) 牧草(チモシー)

作況: 不良

事由: 萌芽期は平年より4日早い4月20日であった。冬損程度は平年並、春の被度は100%であった。

1番草; 5月の気温が高く経過したため、6月の気温は低く経過したものの、1番草の出穂始、出穂期はいずれも平年より1日早く、1番草の収穫は平年より1日早い6月20日に行った。1番草収穫時の草丈は平年より10cm高く、乾物収量は平年比102%と平年並であった。

2番草; 2番草収穫時の草丈は平年に比べ高かったが、節間伸長程度は平年並であった。2

番草の乾物収量は平年比92%と平年より少なかった。

3番草; 2番草収穫(8月10日)後、全般に平年より低温で降水量が少なかったことから3番草の草丈は平年より13cm低く、生草収量は平年の3分の1程度しかなかった。乾物率は平年より高かったものの乾物収量は平年比41%にとどまった。

1~3番草の合計乾物収量は、平年比89%と平年を11%下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表 その1

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月.日)	4.20	4.24	△4
冬損程度		1.0	1.2	△0.2
被度(%)	(5月18日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始	(月.日)	6.13	6.14	△1
出穂期	(月.日)	6.17	6.18	△1
出穂程度	1番草	8.0	8.1	△0.1
節間伸長程度	2番草	3.0	2.9	0.1
刈取日(月.日)	1番草	6.20	6.21	△1
	2番草	8.10	8.10	0
	3番草	10.4	10.4	0
倒伏程度	1番草	1.3	3.7	△2.4

表 その2

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
病害罹病程度	1番草	1.3	1.2	0.1
	2番草	4.0	3.2	0.8
	3番草	3.3	3.1	0.2
草丈(cm)	(5月18日)	37	30	7
	(6月5日)	-	68	-
	1番草	110	100	10
	2番草再生時	38	38	0
	2番草	69	58	11
	3番草再生時	31	46	△15
	3番草	33	46	△13
生草収量(kg/10a)	1番草	2522	2896	△374
	2番草	666	859	△193
	3番草	241	711	△470
	合計	3429	4466	△1037
乾物率(%)	1番草	24.0	20.9	3.1
	2番草	25.4	22.1	3.3
	3番草	30.4	26.1	4.3
乾物収量(kg/10a)	1番草	603	592	11
	同上平年比(%)	102	100	2
	2番草	169	183	△14
	同上平年比(%)	92	100	△8
	3番草	73	178	△105
	同上平年比(%)	41	100	△59
	合計	845	953	△108
	同上平年比(%)	89	100	△11

注1) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、平成27年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 冬損程度は1:無または微~9:甚。出穂程度および節間伸長程度は、1:無~9:極多。倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚。病害は主に斑点病。

11) たまねぎ

作 況：平年並

事 由：播種は、早生種「オホーツク 222」では平年より 1 日早い 2 月 28 日、中生種「北もみじ 2000」では 2 日早い 3 月 9 日に行った。育苗期間中を通して気温はやや高めに推移し、苗の生育は概ね順調であった。移植は、両品種とも平年より 1 日早く行った。移植から 6 月中旬まで降水量は多めに推移し、生育は概ね順調であり、6 月 20 日における生育は、「オホーツク 222」では、草丈、生葉数および葉鞘径のいずれも平年並で、「北もみじ 2000」では、葉鞘径が平年をやや上回っているものの、草丈および生葉数は平年並であった。その後 7 月中旬まで

降水量は多く、7 月の気温は高めに推移したことから、試験ほ場全体に地上部の葉先枯れ症状が若干認められたものの、生育は概ね順調であった。7 月 20 日における生育は、球生重は両品種とも平年よりやや優り、草丈および生葉数、葉鞘径、葉身生重は概ね平年並であった。両品種とも倒伏期は平年より 3 日早く、枯葉期は概ね平年並であった。一球重は平年並で、総収量はやや上回ったものの、変形球等により規格内率はやや劣り、規格内収量は概ね平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		オホーツク 222			北もみじ 2000		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	2.28	3.1	△1	3.9	3.11	△2
出芽期	(月.日)	3.15	3.14	1	3.21	3.23	△2
移植期	(月.日)	5.1	5.2	△1	5.10	5.11	△1
球肥大期	(月.日)	7.13	7.10	3	7.19	7.21	△2
倒伏期	(月.日)	7.28	7.31	△3	8.2	8.5	△3
根切日	(月.日)	8.12	8.13	△1	8.18	8.24	△6
枯葉期	(月.日)	8.19	8.20	△1	8.24	8.26	△2
収穫期	(月.日)	8.29	8.30	△1	9.4	9.10	△6
草丈(cm)	移植時	26.1	20.0	6.1	24.8	20.5	4.3
	(6月20日)	47.5	45.7	1.8	37.9	36.3	1.6
	(7月20日)	86.5	85.5	1.0	87.8	84.6	3.2
生葉数(枚)	移植時	2.7	2.8	△0.1	3.2	3.0	0.2
	(6月20日)	6.4	6.6	△0.2	5.9	5.7	0.2
	(7月20日)	9.6	9.7	△0.1	9.4	9.7	△0.3
葉鞘径(mm)	移植時	3.7	3.7	0	4.2	3.6	0.6
	(6月20日)	12.3	12.0	0.3	10.5	9.6	0.9
	(7月20日)	21.9	21.8	0.1	21.8	21.1	0.7
葉身生重(g)	(7月20日)	172.0	166.8	5.2	152.3	140.2	12.1
球生重(g)	(7月20日)	116.5	109.0	7.5	73.3	66.5	6.8
	(8月20日)	261.1	274.4	△13.3	242.2	246.5	△4.3
総収量(kg/10a)		7980	7731	249	7375	6976	399
規格内収量(kg/10a)		6729	6821	△92	6587	6398	189
同上平年比(%)		99	100	△1	103	100	3
規格内率(%)		84	88	△4	89	92	△3
平均一球重(g)		254	257	△3	237	231	6

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	7.2	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	255	-	-
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	340	-	-
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	-	-	7,491
4. 大豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
5. 小豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
6. 菜豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	-	-	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60.0	23.8	1	-	-	7,003
9. 牧草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	-	-	2.0	-
10. たまねぎ	10.0	2	たまねぎ	30.0	10.5	1	-	-	31,750

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量 (kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	20.0	9.7	3.8	3,000	起生期追肥 N: 3.0	H27年より変更
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0		炭カル:150	
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0			
4. 大豆	1.8	15.0	7.8	3.0			
5. 小豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
6. 菜豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0			
8. てんさい	15.3	30.5	12.5	6.9			
9. 牧草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	2.3			
10. たまねぎ	15.0	20.0	9.0	3.0			

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

(1) 麦類に関する試験

麦類グループ（育種）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験および除草剤などの資材試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業（課題番号26097C）」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。

「奨励品種決定調査」では秋まき小麦の「北見92号」、「北見93号」、「北見94号」、「北見95号」、春まき小麦では「北見春78号」、「北見春79号」および「北見春80号」を供試し、「北見92号」、「北見94号」、「北見95号」、「北見春79号」を試験継続とした。秋まき小麦「北見96号」および春まき小麦「北見春81号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW8号」など6系統について適応性を検討した。

二条大麦では、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 実用技術開発ステージ（育種）（課題番号28038C）」により適応性検定試験を行い、「札育5号」、「札育6号」とも試験継続とした。

(2) ばれいしょに関する試験

作物育種グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は「馬鈴しょ品種開発事業」および「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」の試験研究課題により、安定多収な品種の育成を進めている。また、「北海道畑作で新たに発生が認められた難防除病害虫ジャガイモシロシストセンチュウおよびビート西部萎黄ウイルスに対する抵抗性品種育成のための先導的技術開発」ではジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性品種の育成、ホクレンとの共同研究課題「トヨシロ」

置き換えの加工用馬鈴しょ品種の育成促進」では、熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んでいる。

本年度より新たに3課題を開始し、「早期肥大性に優れるでん粉原料用馬鈴しょ品種の開発強化」では、中期世代の9月上旬収穫による早期肥大性の評価、有望系統の栽培特性および主産地適応性を評価し、普及性の高い有望系統開発を強化している。「DNAマーカー選抜による馬鈴しょ耐病虫性系統の開発強化」では育成3年目の系統について、ジャガイモシロシストセンチュウとジャガイモYウイルスのDNAマーカーによる選抜を実施している。「馬鈴しょの農業形質に関連したDNAマーカーの探索と有効性検証」では、海外で農業形質との関連が報告されているDNAマーカーの有効性検証に向けて、材料養成と解析を行っている。

品質の向上については「でん粉原料用馬鈴しょにおける低離水率・低リン系統の開発強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の開発強化」により、でん粉品質並びにチップ加工適性の優れる品種の開発促進を行っている。耐病性の向上については「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発強化」、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」の各試験研究課題により、新規課題と合わせて耐病虫性（ジャガイモシロシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れる品種の開発促進を進めている。

「奨励品種決定調査」では、加工用「北育22号」、および業務用「北育24号」について検討し、「北育22号」が北海道優良品種に認定され、「北育24号」を継続検討とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成2系統について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行った。

(3) 牧草・飼料作物に関する試験

作物育種グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、品種比較試験、栽培試験などの資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業」では、収量性、

競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業、北海道草地の植生を改善し高品質粗飼料生産を可能とする牧草品種の育成」では、極早生の有望系統「北見32号」、「北見33号」の地域適応性検定試験及び特性検定試験を実施し、3年目の生育・収量を明らかにした。「北見33号」が北海道優良品種に認定された。また、北海道農業研究センターが育成したガレガ2系統、オーチャードグラス2系統、アルファルファ3系統、サイレージ用とうもろこし2系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「良質安定多収に貢献する高TDNチモシー品種の開発促進」では、チモシーの中生及び早生の育成系統の特性検定試験および生産力検定試験、極早生育成系統の飼料成分検定試験を実施した。(一社)日本草地畜産種子協会との共同研究「広域適応性チモシー品種の開発促進」では、早生選抜個体の多交配後代系統の後代検定試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草4草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。サイレージ用とうもろこしでは、「コロサリス(HK1416)」が北海道優良品種に認定された。また、「高精度播種に対応したチモシー主草地の安定造成播種量の設定」では、チモシーの高精度播種時の新たな播種量基準の設定に取り組んでいる。

(4) 栽培環境に関する試験

生産環境グループ(栽培環境)は、土壤肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施している。

本年度は、終了課題「道東地域の秋まき小麦に対する肥効調節型肥料を用いた追肥省略技術の確立」を成果名「肥効調節型肥料を用いた秋まき小麦の全量基肥施用法」として、また「畑作物に対する苦土質肥料『軽焼マグネシウム』の肥効評価」(十勝農試と共同)を「畑作物に対する苦土質肥料『軽焼マグネシウム』の肥効評価」として、さらに「土壤凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上」(十勝農試、北農研と共同)および「土壤凍結深制御法としての雪踏みの

特性と活用法」を「土壤凍結深制御技術による畑地の生産性向上」として各々とりまとめて北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、いずれも平成30年指導参考事項に採択された。

継続課題としては、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「農地土壤炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「新たな品種および栽培法に対応した飼料用とうもろこしの窒素施肥法の確立」(根釧農試と共同)、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進 3)栽培改善による生産および品質の安定化 (1)秋まき小麦『きたほなみ』の子実タンパク質含有率安定化のための気象情報対応型窒素施肥法」(中央農試、十勝農試と共同)、「飼料用とうもろこしに対する塩化カリ肥料の施用効果」(根釧農試と共同)、「農作物病害虫診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壤調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試、花野センターと共同)、「オホーツク地域における客土材の土壤分析」を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「飼料用とうもろこしに対する窒素分施効果の変動要因の解明」(根釧農試と共同)、「土壤凍結深制御手法の高度化・理化学性改善技術への拡張と情報システムの社会実装 2)土壤凍結深制御手法による土壤理化学性改善効果の現地実証および技術体系化」(十勝農試、北農研、JAきたみらい、十勝農協連と共同)、「常呂川流域圏における人間活動と水・物質循環とのつながりの解明」(中央農試、環境研、地質研、さけます内水試、林業試、北総研と共同)である。

(5) 病害虫に関する試験

生産環境グループ(病虫)は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験(新農薬効果査定試験)および病害虫発生予察事業を実施している。

本年度は、終了課題である「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性育種素材の簡易検定法の改良」を成果名「カップ検定法によるジャ

ガイモシストセンチュウ抵抗性判定基準の設定」として、同じく「タマネギ小菌核病の気象情報による発生予測に基づいた効率的防除対策」を「たまねぎの小菌核病に対する効率的防除対策」としてとりまとめた。これらは、北海道農業試験会議（成績会議）に提案し、平成30年指導参考事項に採択された。

前年度から継続して実施した課題は「ムギ類変異集団の作出と利用」（麦類Gと共同）、「病害虫発生予察調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野センターと共同）、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」（そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試、上川農試、十勝農試、道南農試と共同）、「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」（そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試と共同）、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」（作物育種G、十勝農試と共同）、「ジャガイモシロシストセンチュウの効果的な防除法の開発 1 ジャガイモシロシストセンチュウの大規模ほ場における防除技術体系の確立 (1)化学的防除の実施と効果の検証 (3)物理的防除による感染源の低減効果の検証」である。

本年度から新たに実施した課題は「直播栽培を主としたテンサイ黒根病防除対策の検討」、「たまねぎ早期立枯れ症状の原因究明と防除法確立に向けた緊急初動調査」である。

新資材試験では、殺菌剤2剤が北海道農業試験会議（成績会議）において指導参考事項に採択された。

(6) 畑作物および野菜に関する試験

地域技術グループは豆類やてん菜などの畑作物および野菜類の新品種育成・栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験として「地域適応性検定試験」で網走現地圃場において十系系統の適応性の検定を行った。「奨励品種決定基本調査」で大豆の十育系統4系統、「地域適応性検定試験」で小豆の十育系統3系統、菜豆の十育系統3系統の検定を行った。「新優良品種普及促進事業」では、大豆の十育系統1系統、菜豆の新品種1品種を作付けし、種

子生産を行った。公募型研究では網走現地圃場などにおいて、大豆では「ダイズ裂開粒の発生機構解明および裂開抵抗性マーカーの開発」として、中期～後期世代系統の適応性などの検定を行った。小豆では「道東の早生小豆栽培地域における生産安定性の向上」として、早生小豆品種のオホーツク地域向け栽培密度指針の確立に向けた場内・現地調査を行った。花豆では「花豆の高品質省力化に向けた収穫・栽培法の検討」試験で、栽培試験のほか、十勝農試生産システムグループと共同で機械収穫試験等を行った。

てん菜の品種選定では、「てん菜輸入品種検定試験」として民間育成の9系統、「気候変動に対応したテンサイの安定生産を可能にする高度病害抵抗性品種の開発」として、北農研育成の1系統を検定した。北農研育成系統「北海104号」が北海道優良品種に認定された。その他の輸入系統は継続検討が3系統、廃棄が6系統である。そう根病抵抗性検定圃場では、原因不明の萎凋症状が発生した3反復目を除外して判定した。その後、萎凋症状はそう根病であることが確定した。萎凋症状はそう根病抵抗性“強”品種にも発生しており、今後発生原因等を調査する。

てん菜病害に対する試験では、「直播栽培を主としたテンサイ黒根病防除対策の検討」で、黒根病の発生条件の検討と現地実態調査を行った。本年は、夏期に低温と干ばつであったため、黒根病は少発生に止まった。発生条件については、灌水と接種の条件を検討したが、灌水については6、7月の多雨のため処理区間の差が明瞭ではなかった。一方、接種については効果が認められた。現地実態調査は北見市と美幌町の排水不良圃場6箇所で行ったが、北見農試と同様に少発生に止まった。

てん菜の根中糖分を非破壊で測定する試みである「近赤外分光法によるてん菜の根中糖分非破壊評価技術の開発」では、北見農試産の5品種各20個体の根部サンプルを協力機関で近赤外分析に供試し、その後慣行の糖分分析を北見農試で行い、中央農試にて検量線の作成と精度検証を行った。各個体毎の推定精度（SEP）は1%程度であったが、ロット毎では0.15%で、かなり高い精度となった。

たまねぎについて、「加工・業務用たまね

ぎ中生系統の作出と評価」では、共同研究先が行う交配に供するための北見農試系統の母球を養成するとともに、これらの特性を確認し、長球F1系統育成に向けて5系統を次年度の交配に利用することとした。「オホーツク地域向けたまねぎ極早生品種の探索」では、民間育成有望系統19系統の早期は種作型における特性を確認するとともに、乾腐病抵抗性や内部品質を評価した。「たまねぎ直播栽培の球肥大改善のための窒素分施肥技術の開発」では、4月中旬に播種したが、天候不順により、発芽不良となったため、5月中旬に再播種した。窒素分施肥6-8週目で球肥大が改善することを確認するとともに、分施肥後のかん水処理による効果が分施肥時期の降水量と関係することを確認した。

新資材試験は、大豆除草剤1剤、たまねぎ除草剤2剤を検討した。

(7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議3回、4者会議ならびに地域関係者会議を開催し、地域ニーズの調査・対応等を行った。なお、本年度はプロジェクトチームで解決すべき地域課題はなかった。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については、研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

a 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

畑作の支援テーマは、①ICT技術の効果的利用方法の確立、②ばれいしょ施肥管理による増収技術の検討、③畑作物及び園芸作物の安定生産、④でん粉原料用ばれいしょ半身萎凋病の発生実態把握と被害軽減対策の検討、⑤ばれいしょの安定生産技術の確立、⑥QGISによるほ場マップデータの活用、⑦でん粉原料用ばれいしょの安定生産、⑦てんさい直播狭畦栽培による収量性向上効果の確認、⑧根室管内におけるジャガイモシストセンテ

ユウまん延防止に向けた意識啓発である。

園芸では、①有機たまねぎ育苗技術の移植精度の向上、②たまねぎの出荷期間拡大への支援、③高糖度トマト栽培技術の安定化、④カボチャの安定生産支援、⑤小かぶ栽培におけるヒメダイコンバエ防除対策である。

経営では、①TMRセンターの現状と課題に関する情報提供の支援、②経営シミュレーションを活用した将来像の検討、③法人運営体制の定着支援④共同作業・機械共同利用における経済的効果の評価手法⑤哺育育成センター設立にかかる経営計画の技術支援⑥遠紋地区酪農法人会の活動にかかる助言指導、⑦比布町第20区の集落営農打ち合わせへの事例紹介と意見交換への助言、⑧クミカンデータを活用した集計システムにかかる支援、⑨新規就農研修牧場での研修生に対する酪農経営管理研修支援、⑩農作物生産費集計システム活用に向けた支援、⑪QGISの活用方法支援、⑫飼料米の経済性評価に関する助言など実践支援である。他に、畜産課題や高付加価値課題については、窓口対応を行い、専門普及室職員の補完を受け対応した。

また、各専門部会研修、地域課題解決研修、各担当者会議に対して支援した。さらに、害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたる。

b 調査研究の実施

調査研究は3課題である。1つ目は、秋まき小麦のなまぐさ黒穂病の防除対策の確立で現地ほ場において茎葉散布剤、種子消毒剤の比較試験を農薬メーカー協力のもと実施した。種子消毒剤について防除効果が認められ、登録拡大に向かう予定である。品種間による発病の差が認められたが、上川農試の結果と異なることから今後も検討が必要である。未発病地域においてなまぐさ黒穂病の判定が難しくことから、ポリエステル樹脂による包埋標本作製し研修会や普及センターへの配布で現地への情報提供とする。早期発見、早期対応による拡大の防止に役立てる。

2つ目は、オホーツク管内における協業法人の農業機械導入意思決定システムの検討である。協業法人（勝山グリーンファーム：置

戸町)では構成員の機械を賃貸借する事例が多い。数年後には機械の更新が必要となることから従来から所有する機械の単純更新か、法人として高性能機械を導入するか選択に迫られる。機械の導入決定をするに当たり線形計画法や階層分析法を利用し、手順を現地事例法人のばれいしよの栽培体系を基に整理した。貢献利益と労働時間、構成員の意思を反映し協業法人の機械導入時の参考となる。

3つ目は、オホーツク管内におけるたまねぎの出荷期間拡大の検討である。出荷期間の拡大に向けて「早出し(8月(盆前)～)」と「遅出し(5～6月中旬)」を検討している中でそれぞれの現状と課題について検討した。「早出し」については、「品種」や「技術」で対応可能と考えられた。「遅出し」については貯蔵可能期間に生産者間差があることがわかり、長期貯蔵を可能にする生産者の技術を今後「見える化」する必要がある。

調査結果より、出荷期間拡大に向けて現状と課題について整理されたことから、今後具体的な対応策の提案に活用していく。

c 地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトとしての取組はなかった。

d 農業試験場における普及指導員の研修実施

本年度の高度専門技術研修(経営・労働)は3期に分けて開催され、北見農試技術普及室においては前期の対応を行った。

e 農業協同組合等の営農指導機能強化の支援

J A営農指導員研修(耕種部門)は、7月5日、9月11日に実施した。北見農試技術普及室が担当した項目は、「農薬・病虫害防除の基礎知識」、「GPS・GISの基礎知識」である。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 清水基滋・田村元・角野晶大. 北海道における有機栽培ばれいしょの安定生産技術 3. ジャガイモ疫病の防除対策. 北農 84(2): 22-26 (2017).
- 中道浩司・阿部珠代・粕谷雅志・神野裕信. 製パン品質における *Glu-B1*, *Glu-B3* および *Wx-B1* 遺伝子の効果. 日本作物学会紀事 87: 53-60 (2018).
- 楠瀬千春・中村和弘・松中仁・神野裕信・其田達也. レオメータを用いた国産小麦のスポンジケーキの口溶け食感の比較. 九州栄養福祉大学研究紀要 14: 31-37 (2017).
- 藤井弘毅. 経年草地におけるガレガ (*Galega orientalis* Lam.) のシュートの生活史と世代交代. 日本草地学会誌 63(4): 190-198 (2017).
- 三木直倫・前田善夫・小野寺政行. 北海道オホーツク地域の有機栽培タマネギにおける養分収支. 北農 84: 357-365 (2017).
- 小野寺政行・鈴木慶次郎・古館明洋・細淵幸雄・木谷祐也・中辻敏朗. 分施による移植タマネギの窒素施肥法改善およびリン酸強化苗を用いたリン酸減肥技術との併用効果. 日本土壌肥科学雑誌 89: (2017).
- 村松康一・小野寺鶴将・相場勝・奈良部孝・伊藤賢治・串田篤彦. ジャガイモシロシストセンチュウ発生ほ場における土壌くん蒸剤 (D-D剤) の防除効果. 北日本病害虫研究会報 68: (2017).
- 伊藤賢治・奈良部孝・小野寺鶴将・相場聡・串田篤彦・村松康一・相場勝. 下層土におけるジャガイモシロシストセンチュウの存在およびD-D剤の効果. 北日本病害虫研究会報 68: 108-111 (2017).
- 杉山裕・平井剛・柳田大介・田中静幸. 加熱加工業務用タマネギ新品種「ゆめせんか」の栽培法と供給可能期間. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 102: 41-51 (2018).
- 池谷聡・千田圭一・松永浩・関口健二. 北海道のバレイショ品種の1983年から2011年におけるジャガイモ疫病抵抗性の変動. 育種学研究 19: 85-90 (2017).
- 池谷聡. てんさい新品種「HT39」. 北農 84-2: 51 (2017).

2) 口頭発表

- 島田尚典. 北海道の気象及び畑作物の成熟期の変化. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会 (江別市、2017. 12. 2).
- 堀内優貴・佐藤仁・鴻坂扶美子・田澤暁子・島田尚典・青山聡・小倉玲奈・鈴木孝子. 「エリモショウズ」に落葉病抵抗性を導入したアズキ新品種「エリモ167」の育成. 日本育種学会第133回講演会 (福岡市、2018. 3. 25-26).
- Jinno Hironobu, Masashi Kasuya, Takako Suzuki, Yasuhiro Yoshimura, Chihiro Souma, Tetsuya Inoue, Akira Sugawara, Shizen Ohnishi, Tatsuya Sonoda. Breeding lines of resistant to wheat yellow mosaic virus by marker assisted backcross. IWGS2017, Tulln (2017. 4. 23-28).
- 大西志全・粕谷雅志・其田達也・神野裕信・鈴木孝子・山下陽子. 「きたほなみ」戻し交配系統「北見94号」のPPO活性とめん帯外観の変化. 第9回グルテン研究会 (北見市、2017. 7. 6-7).
- 其田達也・神野裕信・池田達哉・吉村康弘・佐藤三佳子・阿部珠代. クラブコムギ由来のグルテニンサブユニットを導入した薄力コムギ系統の育成. 第9回グルテン研究会 (北見市、2017. 7. 6-7).
- 池田達也・神野裕信. 国際小麦遺伝学シンポジウムと小麦イニシアチブの報告. 第9回グルテン研究会 (北見市、2017. 7. 6-7).
- 粕谷雅志. 品種育成と新品種候補の紹介 (道総研). 第9回グルテン研究会 (北見市、2017. 7. 6-7).
- 大西志全・粕谷雅志・其田達也・神野裕信・小林聡・鈴木孝子. 秋まき小麦「きたほなみ」に導入した赤かび病抵抗性QTLの効果とQTLに連鎖する不良形質. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 58: 82-83 (2017).
- 其田達也・大西志全・粕谷雅志・神野裕信・佐藤三佳子・鈴木孝子. Wx-B1座およびクラブコムギ由

来のグルテニンサブユニットが秋まき小麦の品質や農業特性に与える影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 58:56-57 (2017).

- 其田達也. 北海道の日本麺用秋まき小麦におけるMFT遺伝子の導入効果. 第21回穂発芽研究会 (つくば市, 2017. 12. 18-19).
- 足利奈奈. 2017年オホーツク地域における春まき小麦の作柄と穂発芽極難有望系統の紹介. 第21回穂発芽研究会 (つくば市, 2017. 12. 18-19).
- 大西志全・粕谷雅志・其田達也・神野裕信. コムギ育種における収量性の間接選抜のための群落表面温度 (CT) の測定条件の検討. 日本育種学会第133回講演会 (福岡市, 2018. 3. 25-3. 26).
- 足利和紀・出口健三郎・田中常喜. チモシーにおけるリードカナリーグラスとのアレロパシーに関する遺伝率. 北海道畜産草地学会第6回大会 (新得町, 2017. 9. 2-4).
- 大波正寿. 北海道におけるバレイショ育種の概略と成果. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会シンポジウム (江別市, 2017. 12. 2).
- 小野寺政行・荒木英晴・木村篤・草野裕子・広田知良・中辻敏朗. 冬季の土壤凍結深制御によるタマネギ畑の土壤理化学性改善と生産性向上. 日本土壤肥料学会2017年度仙台大会 (仙台市, 2017. 9. 5-7).
- 中辻敏朗・杉川陽一・坂口雅己. 北海道中央部におけるエネルギー作物としての多年生草本の生産性. 日本土壤肥料学会2017年度仙台大会 (仙台市, 2017. 9. 5-7).
- 松本武彦・有田敬俊・木場稔信・八木哲生・酒井 治. 根釧地方の火山性土を充填した草地ライシメータにおける窒素の挙動—大雨を記録した2016年を含む数年間の比較—. 日本土壤肥料学会北海道支部大会 (札幌市, 2016. 11. 30).
- 小野寺鶴将・伊藤賢治・奈良部孝・相場勝. 土壤燻蒸剤処理と捕獲作物栽培によるジャガイモシロシストセンチュウの防除効果. 日本線虫学会第25回大会シンポジウム (札幌市, 2017. 9. 20-22).
- 池田幸子. つぶつぶ診断 Typhula属とSclerotium属. 第11回植物病害診断研究会 (帯広市, 2017. 11. 15-16).
- 池谷美奈子・池谷聡. テンサイ褐斑病に対する防除薬剤の残効期間. グリーンテクノバンク・てん菜研究会第15回技術研究発表会 (札幌市, 2017. 7. 19). てん菜研究会報 58: 43-45 (2017).
- 池谷聡・池谷美奈子. テンサイ褐斑病防除における効果的な薬剤散布時期. グリーンテクノバンク・てん菜研究会第15回技術研究発表会 (札幌市, 2017. 7. 19). てん菜研究会報 58: 46-48 (2017).
- 塚崎光・藤戸聡史・本城正憲・室崇人・田中静幸・若生忠幸・永野惇. RAD-seq解析によるタマネギ連鎖地図の構築. 園芸学会平成29年度秋季大会 (江別市, 2017. 9. 2-4). 園学研 16別2: 501 (2017).
- 杉山裕・柳田大介・田中静幸・大野幸宏. 移植深度がタマネギ長球品種「すらりっぷ」の球形に与える影響. 園芸学会平成30年度春季大会 (奈良市, 2018. 3. 24-25). 園学研 17別1: 177 (2018).

3) 専門雑誌記事

- 清水基滋. <巻頭言> 農薬効果試験. 北農85(1): 1 (2018).
- 神野裕信. 国際学会「第13回国際コムギ遺伝学シンポジウム」に参加して. 北海道米麦改良130号: 20-23 (2017. 10).
- 大西志全. 第9回グルテン研究会講演会の開催. 農家の友10月号 82-83 (2017).
- 大波正寿. なるほど新技術「コナユタカ」安定多収は過剰な窒素施肥を控える. ニューカントリー3月号: 58-59 (2018).
- 品田博史. ジャガイモそうか病抵抗性品種の開発について. 北海道馬鈴しょ協議会だより第20号.
- 小野寺政行. 移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術. 農業と科学 693: 1-5 (2017).
- 小野寺政行. 役に立つ肥料の知識 畑作物・露地野菜における施肥管理の考え方. ニューカントリー1月号: 92-93 (2018).
- 小野寺政行. 土壤凍結深制御による畑地の生産性向上. ニューカントリー4月号: 22-23 (2018).
- 唐星児. 北海道における秋まき小麦の栽培技術と土づくり. 土づくりとエコ農業4・5月号: 7-13 (2017).
- 中辻敏朗. 温暖化は北海道の馬鈴しょにどう影響するか. いも類振興情報 131: 20-24 (2017).
- 池谷美奈子・池谷聡. 最新知識で病害虫に備える テンサイ褐斑病の多発を防ぐ. ニューカントリー

6月号：17-19（2017）.

- 池谷美奈子・池谷聡. てん菜褐斑病の多発傾向に対応した薬剤防除. 農家の友6月号：72-74（2017）.
- 池谷美奈子・池谷聡. テンサイ褐斑病の多発傾向に対応した効果的防除法. てん菜協会だより126号：4-6（2017）.
- 池谷美奈子・池谷聡. てんさいの褐斑病の多発傾向に対応した薬剤防除対策. あぐりさろん21 68号（2017）.
- 池田幸子. *Microdochium nivale*による秋まき小麦の葉枯症状発生要因と赤かび病の防除対策. ニューカントリー3月号：48-49（2018）.
- 田中静幸. 7月下旬～8月初旬出荷を目指した栽培法. ニューカントリー9月号（762）：12-15（2017.9）.
- 杉山裕. 冷蔵で5月上旬まで可能な加工用新品種. ニューカントリー9月号（762）：19-21（2017.9）.
- 池谷聡. てん菜新品種 高糖分型ながら主力品種に収量性が近い「ライエン」. ニューカントリー7月号（760）：52-53（2017.7）.
- 池谷聡. 平成29年産てん菜の生産実績とその要因について. てん菜協会だより128：3-5（2018）
- 木俣栄. 今後の小麦病害虫防除対策. 北海道米麦改良126号：9-15（2017.5）
- 山岸修一. 「オホーツク冬のICT農業セミナー2017」を終えて. 農家の友5月号：66-68（2017）
- 佐々木康洋. 特集 平成29年度技術総括 野菜. 農家の友12月号：26-27（2017）
- 木俣栄. 豆類の病害虫. 明日の豆作り：100-120（2018.1）

4) 著編書、資料

- 神野裕信. 小麦の新品種ができるまで. 北海道米麦改良協会パンフレット（2017.6）.
- 神野裕信. 平成29年度小麦作柄調査の概要について. 北海道米麦改良協会ホームページ掲載（2017.7）.
- 神野裕信. 北海道の小麦づくり II 小麦品種の特性と栽培上の留意点. 平成30年度「北海道の小麦づくり」：47-59（2018.2）.
- 唐 星児. 北海道の小麦づくり III 良質小麦生産のための施肥および土壌管理. 平成30年北海道米麦改良協会講習会資料：61-87（2018）
- 清水基滋. 小麦スッポヌケ症、小麦うどんこ病、馬鈴しょ塊茎褐色輪紋病、てん菜葉腐病、てん菜根腐病、てん菜黒根病. 新・北海道の病害虫 ハンドブック全書ニューカントリー 秋季臨時増刊号：34, 40-41, 98, 111-114（2017）.
- 池谷美奈子. 大豆べと病、馬鈴しょ粉状そうか病、てん菜そう根病、てん菜褐斑病、てん菜蛇の目病、てん菜斑点病、てん菜ステンフィリウム斑点病、たまねぎ軟腐病、たまねぎ白斑葉枯病、たまねぎ小菌核病. 新・北海道の病害虫 ハンドブック全書ニューカントリー 秋季臨時増刊号：66, 90, 102-103, 106-110, 186-187, 192（2017）.
- 池田幸子. 小麦赤さび病、大麦網斑病、大麦斑葉病、大麦雲形病、馬鈴しょ疫病、馬鈴しょ黒あざ病、てん菜斑点細菌病、てん菜そうか病、てん菜苗立枯病、にんじん雪腐菌核病. 新・北海道の病害虫 ハンドブック全書ニューカントリー 秋季臨時増刊号：39, 53, 53-55, 88-89, 91, 99, 104-105, 222-223（2017）.
- 小野寺鶴将. 大豆マメシンクイガ、馬鈴しょナストビハムシ、馬鈴しょジャガイモシストセンチュウ、馬鈴しょジャガイモシロシストセンチュウ、馬鈴しょオオニジュウヤホシテントウ、てん菜ヨトウガ、アブラナ科タネバエ・ダイコンバエ・ヒメダイコンバエ、りんごモモシンクイガ、りんごキンモンホソガ、りんごハマキガ類、りんごオビカレハ、おうとうコスカシバ、おうとうモンクロシャチホコ、ぶどうツマグロアオカスミカメ、ぶどうチャノキイロアザミウマ、なしナシマダラメイガ、なしモモチョッキリゾウムシ. 新・北海道の病害虫 ハンドブック全書ニューカントリー 秋季臨時増刊号：300-301, 314-315, 318-322, 378, 408-411, 413, 416-419, 421-422（2017）.
- 田中静幸. 食育クイズこれは何の花？. 少年写真新聞社：45（2017）.
- 池谷聡. さやあかね—高品質で強い疫病抵抗性をもつ青果用ジャガイモ品種. 最新農業技術作物vol.10：133-146. 農文協（2018.1）.
- 木俣栄. 平成29年度秋まき小麦・春まき小麦の病害虫と防除. 北海道米麦改良協会パンフレット（20

17.4).

5) 新聞記事

- 松永浩. バレイシヨの貯蔵技術. 農業共済新聞 (2017.9.27).
- 大波正寿. バレイシヨ「コナユタカ」の安定生産技術 (2018.2.21).
- 藤井弘毅. チモシー新品種 着実に能力向上. 日本農業共済新聞 (2017.10.25).
- 池田幸子. 秋まき小麦の雪腐病対策のポイント. 日本農業新聞 (2017.10.19).
- 池谷聡. 高糖分で多収のてんさい新品種「ライエン」. 日本農業共済新聞 (2017.11.8).

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) 大豆新品種「十育258号(品種名未定)」
- (2) ばれいしょ新品種「北育22号(品種名未定)」
- (3) チモシー新品種「北見33号(品種名未定)」
- (4) とうもろこし(サイレージ用)「コロサリス(HK1416)」

2) 普及推進事項

- (1) てんさい新品種「北海104号(品種名未定)」

3) 指導参考事項

- (1) 土壌凍結深制御技術による畑地の生産性向上
- (2) 肥効調節型肥料を用いた秋まき小麦の全量基肥施用法
- (3) 畑作物に対する苦土質肥料「軽焼マグネシウム」の肥効評価
- (4) たまねぎの小菌核病に対する効率的防除対策
- (5) 除草剤
 - ①春まき小麦に対する除草剤「HSW-062フロアブル(ガルシアフロアブル)」の実用化(水量拡大)
- (6) 殺虫・殺菌剤
 - ①たまねぎの白斑葉枯病に対するフルオピラム水和剤F(15日間隔散布)の効果
 - ②たまねぎの小菌核病に対するピコキシストロビン水和剤Fの効果
 - ③たまねぎの小菌核病に対するフェンブコナゾール・マンゼブ水和剤(未登録)の効果
 - ④たまねぎの小菌核病に対するマンデストロビン水和剤F(未登録)の効果

4) 研究参考事項

- (1) カップ検定法によるジャガイモシストセンチュウ抵抗性判定基準の設定

3 品種登録・特許申請

- メロン「おくり姫」、八木亮治、地子立、平井剛、福川英司、木村文彦、田中静幸、佐藤昌一、佐藤善蔵、佐藤公治、出願日-2015/6/29、出願番号-30290、出願公表日-2015/9/29、登録年月日-2017/6/5、登録番号-25998
- メロン「DHM-R6」、八木亮治、地子立、平井剛、福川英司、木村文彦、田中静幸、佐藤昌一、佐藤善蔵、佐藤公治、出願日-2015/6/29、出願番号-30292、出願公表日-2015/9/29、登録年月日-2017/6/14、登録番号-26009
- タマネギ「KTM9843-02-01A」、柳田大介、田中静幸、入谷正樹、駒井史訓、小谷野茂和、西田忠志、野田智昭、出願日-2014/6/16、出願番号-29291、出願公表日-2014/10/28、登録年月日-2018/1/30、登録番号-26446
- タマネギ「KTM9843-02-01B」、柳田大介、田中静幸、入谷正樹、駒井史訓、小谷野茂和、西田忠志、野田智昭、出願日-2014/6/16、出願番号-29292、出願公表日-2014/10/28、登録年月日-2018/1/30、登録番号-26447

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	H29. 4. 19	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29. 5. 18	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29. 6. 5	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29. 7. 4	農試会議室	場員
新規課題場内検討会議	H29. 6. 27	農試講堂	場員
定例庁内会議	H29. 8. 3	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29. 9. 8	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29.10. 4	農試会議室	場員
場内防疫対策打ち合わせ	H29.10.18	農試講堂	場員
定例庁内会議	H29.11. 1	農試会議室	場員
現地委託試験成績検討会	H29.12. 2	JAきたみらい訓子 府地区事務所 3階大会議室	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等
定例庁内会議	H29.12. 4	農試会議室	場員
成績会議場内検討会	H29.12.13	農試講堂	場員
定例庁内会議	H30. 1.12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30. 2. 7	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	H30. 2. 5, 7, 14	農試講堂	場員
定例庁内会議	H30. 3.12	農試会議室	場員
現地委託試験設計検討会	H30. 3.20	農試講堂	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員長：島田研究部長

事務局長：浅山 聡(ほ場管理)、山井雅之(施設等整備)

委員：佐々木賢、伊藤幸雄、神野裕信、大波正寿、藤井弘毅、小野寺政行、小野寺鶴将、
萩原誠司、奥山昌隆

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：平成29年5月15日

1) 平成30年度施設整備等要望について

2) A 3 ほ場南側のトドマツ防風林について

3) 平成29年度 現地から場内への植物体の持込(予定)調査結果のまとめと対応について

第2回：平成29年7月19日

1) 平成29年度及び平成30年度設備計画防風林の現地調査について

2) 平成29年度防風林の整備方針について

第3回：平成29年11月7日

- 1)平成30年度試験研究用備品の予算要望について
- 2)第3回中期計画に向けたほ場整備計画案について

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：浅山聡

委員：伊藤幸雄、粕谷雅志、青山 聡、足利和紀、唐 星児、池田幸子、池谷 聡

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成29年4月13日

- 1)業務委員会開催要領
- 2)麦類G（管理）業務体制
- 3)室外契約職員体制
- 4)月間作業予定
- 5)週間作業予定
- 6)作付計画
- 7)4月下旬の作業予定

② 定例委員会：4月20日から10月26日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1)機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2)室外契約職員週間作業計画

③ 第1回臨時委員会：平成30年3月28日

- 1)室外契約職員の応募状況、面接方法

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：立山裕之、森田耕一、藤井弘毅、池谷美奈子、奥山昌隆（図書連絡委員兼務）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成29年4月19日

- 1)図書連絡委員の選任
- 2)今年度業務内容の確認

② 第2回委員会：平成29年5月15～25日（メール会議）

図書管理システムの導入について

③ 第3回委員会：平成29年11月28日

- 1)平成30年度定期刊行物購入計画の策定
- 2)オンラインのみの外国語雑誌の購入について

④ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：稲村浩至、大西志全、松永 浩（システム管理者兼務）、唐 星児、池谷 聡

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成29年4月19日

- 1)システム管理者の選任

- 2)業務分担の確定
 - 3)北見農試ホームページ操作マニュアルの利用について
 - 4)場内LANDISK管理について
- ② ホームページの更新：16回実施

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

委員：杉本義則、森田耕一、足利和紀、小野寺鶴将、田中静幸（兼任）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月12日

- 1)本年度の委員について
- 2)平成28年度報告について
- 3)フロンガス点検
- 4)懸案事項

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：島田尚典

事務局長：富田謙一

気象担当：中辻敏朗

とりまとめ：其田達也

委員：其田達也、足利奈奈、品田博史、池谷 聡、萩原誠司、足利和紀、飯田憲司、
杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成29年4月12日

- 1)定期作況報告の実施体制
- 2)定期作況調査報告実施要領
- 3)年間日程
- 4)具体的作業日程と該当作物
- 5)最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：島田尚典

事務局：山井雅之、中辻敏朗

委員：中出秀信、森田耕一、青山 聡、飯田憲司、木場稔信、小野寺鶴将、萩原誠司、
奥山昌隆、山岸修一

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成29年4月26日

- 1)実施方針について
- 2)イベント内容と班編制およびリーダーについて
- 3)試食・クイズラリー景品用の馬鈴しょとたまねぎ作付について
- 4)今後の進め方について

- ② 第2回委員会：平成29年5月24日
 - 1)各イベントへの職員配置について
 - 2)イベント企画案について（たたき台の提示）
 - 3)物品購入，契約職員の必要人数，机・椅子の必要数について
- ③ 第3回委員会：平成29年6月27日
 - 1)イベント準備の進捗状況報告
 - 2)購入物品のとりまとめ結果について
 - 3)ポスター案の検討
 - 4)今後の作業スケジュールについて
- ④ 第4回実行委員会：平成29年8月1日
 - 1)イベント準備の進捗状況最終報告
 - 2)前日から当日の流れについて
 - 3)当日の配布チラシについて
- ⑤ 第5回実行委員会：平成29年10月24日
 - 1)開催結果の概要報告
 - 2)来場者アンケート集計結果の報告
 - 3)公開デーに係る場員からの意見・反省点・改善方向への対応について
 - 4)来年度の開催日について（後日の庁内会議での承認により平成30年8月9日に決定）
 - 5)各イベント実施手順等の引き継ぎについて

8) オホーツク圏農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

事務局：山井雅之、浅山 聡、富田謙一、中辻敏朗

実行委員：粕谷雅志、松永 浩、足利和紀、木場稔信、池谷美奈子、奥山昌隆

(2) 活動内容

①第1回実行委員会：平成29年11月14日

- 1)準備経過確認（12月14日、庁内会議提案）
- 2)口頭発表課題の確認およびパネル展示候補課題の選定（案）
- 3)開催案内チラシの作成について
- 4)要旨原稿集約・編集担当の選定
- 5)パネル集約担当の選定
- 6)口頭発表データ集約・編集担当の選定
- 7)広報および場内対応について確認
- 8)その他準備

②発表課題検討：平成30年1月12日（場長打合せ）

③北見市端野町公民館との打ち合わせ：

- 1)平成29年11月6日 会場仮予約（2月27日）
- 2)平成30年2月15日

出席者：田中静幸、奥山昌隆

会場設備、当日進行等の確認

④口頭発表リハーサル：平成30年2月16日

口頭発表担当者：藤井弘毅、大波正寿、萩原誠司、池谷 聡、池田幸子、池谷美奈子、唐 星児、小野寺政行、草野裕子（網走農業改良普及センター）

⑤セミナー開催：平成30年2月27日、13:00開会、16:00閉会

⑥第2回実行委員会：平成30年3月26日

- 1) 場者アンケート結果について
- 2) 員アンケート結果について
- 3) 次年度開催案について

9) その他委員会

(1) 安全衛生に係る意見交換会：平成30年3月12日

- ① 出席者 清水基滋（管理責任者）、山井雅之（衛生推進者）、稲村浩至（安全衛生担当者）
池谷美奈子（支部長代理）、松永 浩（書記長）
浅山 聡、富田謙一、中辻敏朗、田中静幸

② 活動内容

平成29年度に実施した安全衛生関係の事業について説明

健康診断、労務災害、農作業安全、労働安全確保対策、環境測定結果、防火訓練、年休・夏期・冬期休暇の取得状況、その他

(2) 公宅入居委員会：平成30年3月13日

- ① 出席者 山井雅之（場長指定）、池谷美奈子（支部長代理）、松永 浩（書記長）、
樫村 優（弥生町内会）、粕谷雅志（若葉町内会代理）、稲村浩至（事務局）

② 活動内容

平成30年4月1日付け人事異動による公宅入居希望者の決定、
公宅管理を行っているオホーツク総合振興局総務課へ報告

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
平成24年度 春まき小麦育種試験成績書	29. 4	110	65
平成27年度 春まき小麦育種試験成績書	29. 4	148	65
肥効調節型肥料を用いた秋まき小麦の全量基肥施用法	30. 2	32	100
土壤凍結深制御技術による畑地の生産性向上	30. 2	68	150
平成30年度 「オホーツク農業技術セミナー」 発表要旨集	30. 2	36	250
平成25年度 春まき小麦育種試験成績書	30. 3	88	65
平成29年度 飼料作物の育種に関する試験成績書	30. 3	68	50
平成28年度 秋まき小麦育種試験成績書	30. 3	150	65

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名称	開催日	場所	内容	参加者
たまねぎ極早生品種見学会	H29. 7. 19	北見農試	「オホーツク地域向けたまねぎ極早生品種の探索」に係る圃場見学	70名
オホーツク・スマート農業セミナー2017	H29. 11. 8	訓子府町公民館	講演4題、展示7社、自動操舵トラクタの実演・試乗体験	172名
オホーツク圏農業新技術セミナー	H30. 2. 27	北見市端野町公民館	講演8題、パネル展示13枚	167名
たまねぎ成績報告会	H30. 3. 12	訓子府町公民館	講演3題	13名

2) マスコミ、広報誌等による報道

タイトル	報道機関	掲載・放送日
たまねぎ通年出荷へ試験	日本農業新聞全道版	H29. 8. 28
タマネギ出荷前倒し模索	北海道新聞北見地方版	H29. 6. 13
極早生たまねぎ試験経緯	NHK札幌放送局	H29. 5. 24
辻綾子のいいお野菜出合い旅（試験場の仕事など）	FMオホーツク	H30. 2. 21

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 第9回グルテン研究会

日時：平成29年7月6日～7日

場所：北見芸術文化ホール、北見農試場内、北見市生産者圃場

主催：道総研北見農試

北見農試来場者：約80名

行事内容：講演会、ポスター発表、農試及び現地圃場の視察。

(2) 北見農試公開デー2017

日時：平成29年8月9日 9時30分～13時（受付は12時30分まで）

場所：場内

天候：雨時々曇り（最高気温20.3℃）

来場者：226名（うち小学生以下52名）

行事内容：クイズラリー（会場内7か所に各研究室出題のクイズ設置）、研究成果展示（新品種、栽培技術などのパネル展示、作物の展示）、畑作園芸相談コーナー（栽培法、肥料、病気、害虫などの技術相談、資料展示）、ほ場見学バスツアー（車中から見学、3回運行）、畑で働く農業機械展（7機種を展示）、試食コーナー（バターロール、ポテトチップ、ふかしいも、冷やし汁粉を提供）、おもしろ体験コーナー（どれが甘いかな、スーパーボールすくい）、網走水試コーナー（プランクトン観察、ホタテガイ解剖デモ、焼ホタテ試食）、地場産野菜、地元産品等の販売（ファーマーズマーケット「夢ミール」、株式会社ツムラ）、北海道農業改良普及協会による農業関連書籍の販売

(3) ビジネスEXPO

日時：平成29年11月9日～10日

場所：アクセスサッポロ

主催：北海道等

来場者：21,000名

出展内容：たまねぎ「ゆめせんか」、「すらりっぷ」サンプル、パネル展示、リーフレット配付

(4) アグリビジネスフェア

日時：平成30年3月13日

場所：ホテルエミシヤ札幌

主催：農林水産省

来場者：300名

出展内容：たまねぎ「ゆめせんか」、「すらりっぷ」のパネル展示、リーフレット配付

5 見学受入れ

年月日	団 体 名	人 数
H29. 5. 23	北海道別海高等学校専攻科学生	14人
H29. 6. 9	豊里農業経営活性化協議会	15人
H29. 6. 13	日本特産農作物種苗協会 網走特産種苗センター	7人
H29. 6. 21	網走農業改良普及センター所長・支所長会議	15人
H29. 6. 22	芽室町玉葱生産組合	13人
H29. 6. 23	美幌町種子麦生産組合	9人
H29. 6. 26	J A斜里町 川上麦作集団	17人
H29. 6. 28	北海道米麦改良協会	30人
H29. 6. 28	岩見沢市農村連絡協議会	22人
H29. 6. 29	J Aきたみらい 南地区玉葱青年部	30人
H29. 6. 30	北見地区農村ゼミナール	12人
H29. 7. 3	J Aびばい青年部	32人
H29. 7. 3	空知地区米麦改良協会主催「空知管内小麦生産技術研修会	14人
H29. 7. 4	北ひびき農業協同組合	22人
H29. 7. 6	J Aいわみざわ玉葱調査会	10人
H29. 7. 7	音更町農協青年部	66人
H29. 7. 7	J Aサロマ 麦耕作生産協議会	10人
H29. 7. 10	音更町農業士会	15人
H29. 7. 11	北海道澱粉工業協会 研究開発委員会 原料対策部会員他	13人
H29. 7. 11	酪農学園大学循環農学類 作物学研究室	5人
H29. 7. 11	北ひびき農業協同組合 朝日基幹支所	13人
H29. 7. 11	J Aこしみず 駿農人養成セミナー第5期生	8人
H29. 7. 14	音更町東士狩矢部地区農事組合	12人
H29. 7. 21	株式会社丹波屋肥料部	11人
H29. 7. 21	長野県議会議員	2人
H29. 7. 24	一般社団法人 滝川国際交流協会モンゴル農業者等	10人
H29. 7. 24	女満別町玉葱振興会	15人
H29. 8. 1	日本甜菜製糖株式会社 美幌製糖所	15人
H29. 8. 8	佐賀県杵藤農林事務所杵島農業改良普及センター	2人
H29. 8. 9	きたみらい農業協同組合	58人
H29. 8. 10	北海道立農業大学校 畑作園芸経営学科1年生	5人
H29. 8. 24	北見工業大学大学院	30人
H29. 8. 24	兵庫県立農林水産技術総合センター	2人
H29. 8. 25	北見地区玉葱振興会	50人
H29. 9. 19	完州農業技術センター（韓国）	18人
H29. 10. 5	十勝農業改良普及センター 十勝東部支所	2人
H29. 11. 27	札幌玉葱生産販売対策協議会 自主検査委員会	12人
H29. 12. 6	音更町農協簿記青色普及会	13人
H30. 3. 13	北落合青年会	10人

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研修項目	団体・人数	研修期間	対応グループ
平成29年度普及指導員研修 (高度専門技術研修・(経営・労働)) 前期	網走農業改良普及センター本所(1名) 十勝農業改良普及センター十勝西部支所 (1名)	H29. 9. 5~7	技術普及室

2 講師派遣

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
中斜里製糖工場区域内畑作 研究センター試験方案会議 研修会	中斜里製糖工場区 域内畑作農業研究 センター運営協議 会	H29. 4. 18	テンサイ褐斑病の薬剤を中心 とした効果的防除法	池谷美奈子
平成29年度北見施肥防除合 理化推進連絡協議会研修会	北見施肥防除合理 化推進連絡協議会	H29. 4. 21	土壌診断による飼料用とうも ろこしの窒素施肥対応 テンサイ褐斑病の薬剤を中心 とした効果的防除法	唐星児 池谷美奈子
スーパー連携大学院プログ ラム「現役社長の講話IV」	国立大学法人北見 工業大学	H29. 4. 21	農業試験場のおしごと	清水基滋
平成29年度北海道士壤肥料 協議会現地検討会講演会	北海道士壤肥料協 議会	H29. 6. 16	土壌凍結深制御技術を応用し た畑地の理化学性改善 ジャガイモシロシストセン チュウの発生と試験研究の取 り組み	小野寺政行 小野寺鶴将
玉葱講習会	JAきたみらい南地 区玉葱青年部	H29. 6. 22	土壌凍結について	小野寺政行
オホーツクJA営農指導員技 術研修	JA北海道中央会北 見支所	H29. 7. 5	土壌pHの測定法 農薬・病害虫防除の基礎知識	中辻敏朗 木俣栄
オホーツクJA営農指導員技 術研修	JA北海道中央会北 見支所	H29. 9. 11	GPS・GISの基礎知識	山岸修一
土壌凍結深制御技術(雪踏 み)研修会	JAきたみらい	H29. 11. 13	土壌凍結深制御技術を応用し た畑地の理化学性改善による 生産性向上について	小野寺政行
第7回海外悪性伝染病講習 会	国立大学法人帯広 畜産大学	H29. 11. 24	シストセンチュウについて知 ってもらいたいこと	小野寺鶴将
平成29年度全国農業システ ム化研究会	全国農業改良普及 支援協会	H29. 11. 28	オホーツク管内における畑作 ・野菜でのICT活用事例	山岸修一
気象の変化に係る適正作物 の変化・新規作物の可能性 勉強会	JAオホーツク網走 青年部農政委員会	H30. 1. 15	温暖化は北海道の農作物に どう影響するかー2030年代の 予測と対応方向ー	中辻敏朗
農作物のシストセンチュウ について	JA清里町青年部	H30. 1. 30	農作物のシストセンチュウに ついて	小野寺鶴将

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
平成29年度資源管理・資源増殖部門合同シンポジウム 「気候変動とその対策に関する研究課題」	道総研水産研究本部	H30. 1. 24	温暖化は北海道の農作物にどう影響するかー2030年代の予測と対応方向ー	中辻敏朗
高品質てん菜づくり講習会	北海道てん菜協会	H30. 2. 6	薬剤耐性菌の発生に対応した テンサイ褐斑病の当面の防除 対策	池谷美奈子
豆作り講習会	公益財団法人日本豆類協会	H30. 2. 7	てんさい直播栽培の基本技術 豆類の病害虫と防除について 豆類の新品種について(エリモ 167、きたロツソ、かちどき)	池谷聡 池田幸子 萩原誠司
普及指導員新技術研修会	オホーツク総合振興局	H30. 2. 8	畑作の新技術	奥山昌隆
JA小清水町種馬鈴しょ部会講習会	JA小清水町	H30. 2. 15	新しいでん粉原料用の「コナ ヒメ」「コナユタカ」の栽培特 性について	大波正寿
畑作営農技術研修会	JAオホーツク網走	H30. 2. 23	「きたほなみ」の品種特性と 気象変動下での栽培について	神野裕信
玉ねぎ部会栽培技術講習	JA斜里町	H30. 2. 23	直播玉葱栽培におけるポイン ト	杉山裕
平成29年度良質米麦生産技術講習会(オホーツク)	北海道米麦改良協会	H30. 3. 1	今年の病害虫対策について	木俣栄
たまねぎ生産性向上講習会	郷幌(Satohoro)	H30. 3. 7	新しいたまねぎの施肥技術に ついて	小野寺政行
土壌凍結深制御技術に関する勉強会	JAふらの南富良野町北落合青年会	H30. 3. 13	野良イモ退治だけじゃない! 土を凍らせて畑の生産力アッ プ	中辻敏朗
土壌凍結深制御技術成果発表会	訓子府町	H30. 3. 22	土壌凍結深制御技術による畑 地の生産性向上について	小野寺政行
JAオホーツク網走畑作栽培講習会	JAオホーツク網走	H30. 3. 23	でん粉原料用馬鈴しょ新品種 「コナユタカ」の栽培特性	大波正寿

3 職員研修

氏名	研修項目	場所	期間
檜村 優	危険物取扱者保安講習	北海道危険物安全協会連合会	H29. 4. 27～H29. 4. 28
井口 岳人	床上操作式クレーン運転特別教育	(株)技術能力開発センター 北見教習所	H29. 5. 18～H29. 5. 20
池谷 聡	国内研修Ⅱ「グリーンテクノバン ク・てん菜研究会」	札幌市北農ビル	H29. 7. 18～H29. 7. 20
田中 静幸	国内研修Ⅱ「園芸学会秋季大会」	江別市酪農学園大学ほか	H29. 9. 1～H29. 9. 4
檜村 優	採用3年目研修	食品加工研究センター	H29. 10. 19～H29. 10. 20

4 職場研修

研修会および講習会	講師	開催日
病虫害汚染防止・農作業安全研修	場長 清水基滋、研究主幹 浅山 聡	H29. 6. 2
契約職員に対する作業指示	研究部長 島田尚典	
平成29年度防火訓練	訓子府消防署	H29. 10. 20
職員交通安全・鳥インフルエンザ防疫 訓練研修	北見地区安全運転管理者協会講師 研究部長 島田尚典	H30. 1. 9

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期間
該当無し			

Ⅶ その他

1 技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取組はなかった。

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームとしての取組はなかった。

3 表彰・受賞

- (1) 平成29年度地方独立行政法人北海道立総合研究機構職員表彰・知事賞（平成29年10月13日）
「複合障害抵抗性と機械収穫に優れた大豆品種「ユキホマレ」とその品種改良群の育成」
十勝農業試験場大豆育種チーム：田中義則・黒崎英樹・山崎敬之・鈴木千賀・三好智明・萩原誠司・大西志全・山口直也・富田謙一
- (2) 平成29年北農賞（第78回）（平成29年12月15日）
論文：ジャガイモシストセンチュウ発生ほ場における密度推定のための省力的な土壌サンプリング法
（北農84巻第1号掲載）
小野寺鶴将・古川勝弘・奥山昌隆・真鍋照彦・伊藤舞・斉藤克史
- (3) 平成29年北農賞（第78回）（平成29年12月15日）
論文：北海道における有機栽培ばれいしょの安定生産技術（北農79巻第1号, 82巻第3号, 84巻第2号掲載）
田村元・清水基滋・加藤淳・中津智史・竹内晴信・角野晶大

4 行事

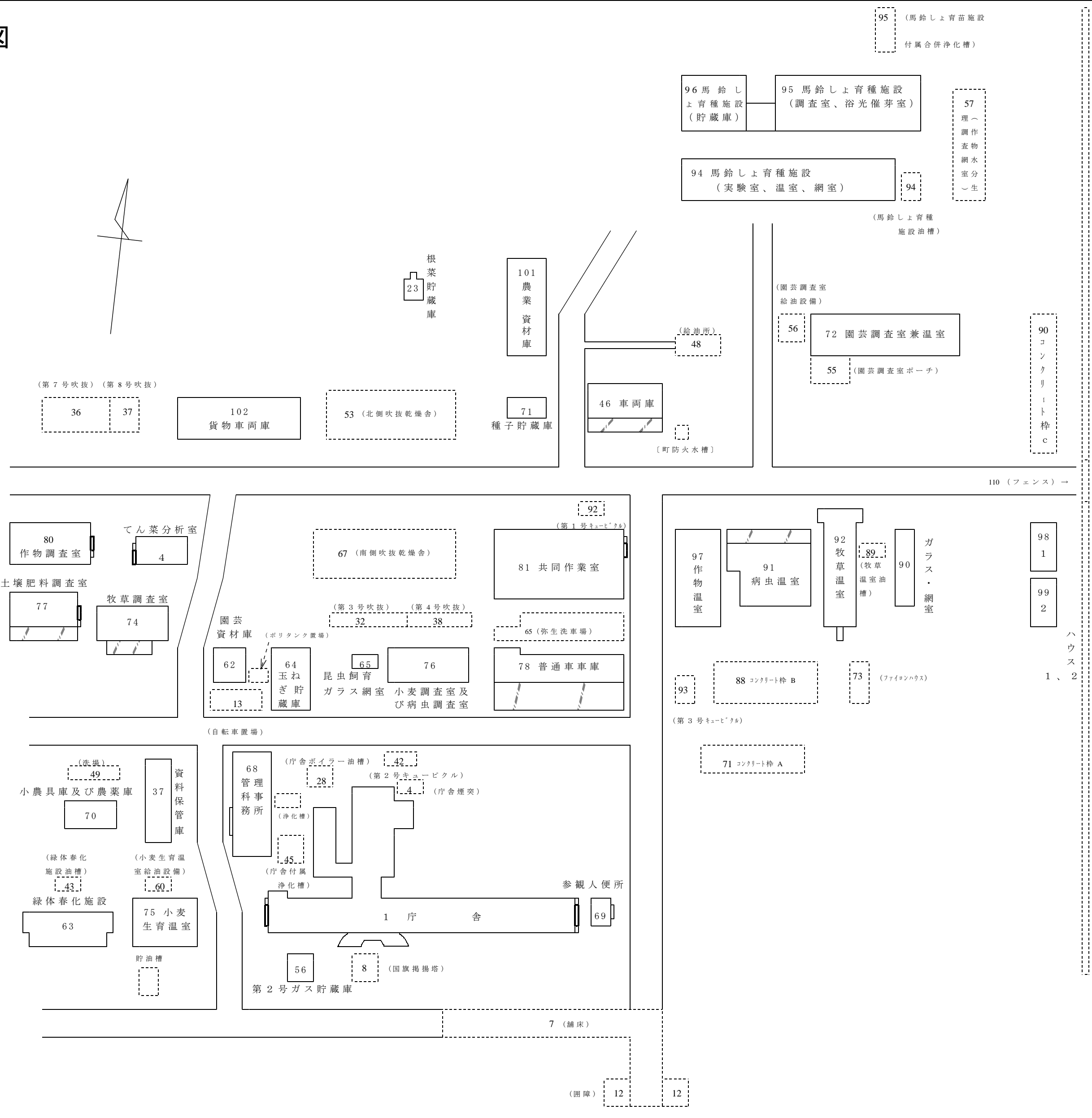
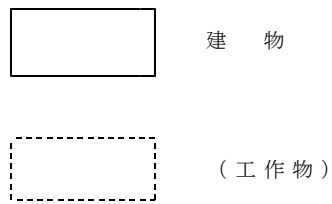
月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 3日	辞令交付式（新規採用）	12月 4日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
13日	農研本部場長会議	7日	オホーツク現地試験成績検討会
24日	北見工業大学社会連携推進センター推進協議会	13日	場内成績検討会議
25日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	1月 9日	職場研修(交通安全)
5月 16日	研究部長会議	22-26日	北海道農業試験会議成績会議
23-24日	オホーツク総合振興局農政施策振興会議	25日	農研本部場長会議
6月 2日	職場研修(ほ場汚染防止・労働安全)	2月 5日	場内設計会議
9日	農研本部場長会議	6日	訓子府町農業関連事業所懇談会
9日	北海道農業技術推進委員会	7日	場内設計会議
10日	訓子府町地域活性化チャレンジ事業選考委員会	14日	場内設計会議
12日	見学案内リハーサル	19日	設計会議 てん菜分科会
20日	ほ場利用現況確認	21日	NATEC定期総会・研究交流会
26日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト	22日	農業新技術発表会（全道版）
27日	場内新規課題検討会議	27日	オホーツク農業新技術セミナー
30日	北見地区玉葱振興会50周年記念式典	3月 1日	北見工大連携交流会
7月 6日	新規課題検討会議（畜産部会）	5-9日	北海道農業試験会議設計会議
11-13日	新規課題検討会議	12日	安全衛生に関する意見交換会
8月 8日	オホーツク地域農業気象連絡協議会	14日	農研本部場長会議
10日	北見農業試験場公開デー	15日	研究本部長・場長会議
30日	東京農大・道総研連携・協力協定締結記念シンポジウム	16日	北海道農業試験研究推進会議本会議
31日	設計会議 秋まき小麦分科会	19日	オホーツク地域農業技術支援会議・地域関係者会議
9月 26日	第2回場長会議および全国場所長会議北海道ブロック会議	19日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
10月 20日	防火訓練	20日	北見地区食用馬鈴しょ振興会20周年記念式典
25日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	22日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト
26日	北見工大社会連携推進員・協力員合同会議		
11月 7日	農研本部場長会議		
8日	オホーツク・スマート農業セミナー2017		
15日	てん菜輸入品種検定試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
16日	馬鈴しょ輸入品種選定等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
17日	道産小麦品質向上プロジェクト成績検討会		
22日	オホーツク鳥インフル防疫訓練		

5 自己点検への対応

事 項	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
研究成果発表会の開催件数	1	1	1	2	0	2	1	1
研究成果発表会への延べ参加人数	176	234	189	247	0	496	169	136
研究会等の開催件数	0	2	2	4	0	0	1	1
研究会等への延べ参加人数	0	338	319	650	0	0	39	97
発表会・展示会等への出展件数	5	4	8	1	0	2	1	2
研究報告書の発行状況	—	—	7	6	4	4	2	4
技術資料の発行状況	—	—	2	1	1	1	4	1
学会やシンポジウム等での発表件数	18	28	39	47	24	36	33	20
学術誌や専門誌への投稿論文数	9	14	13	18	17	10	16	11
普及組織との連絡会議等開催件数	2	0	12	40	59	9	9	10
技術相談件数	80	58	70	88	43	66	85	89
技術指導件数	126	214	178	175	148	78	56	55
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	—	—	26	32	16	15	31	30
研究成果の公表・活用状況(書籍)	—	—	11	1	6	1	2	2
研究成果の公表・活用状況(新聞)	—	—	6	4	8	2	7	3
技術審査件数	1	1	1	2	1	1	1	0
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	8	9	0	0	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	0	135	116	182	48	94	180	115
研修会・講習会等の開催件数	0	1	0	2	14	0	2	2
研修会・講習会等の延べ参加者数	0	7	0	11+?	1,200	0	520	308
研修者の延べ受入人数	4	4	5	16	10	2	0	0
特許等の出願件数	1	1	2	1	0	0	1	4
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	1	1
視察者・見学者の受入件数	40	36	45	61	33	26	37	38
視察者・見学者の延べ人数	776	650	668	855	512	371	603	648
学会等役員・委員等件数	5	7	6	11	12	14	17	9
国際協力事業等への協力件数	2	2	0	0	0	0	2	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	1	7	29	21	25	37	28	20
市町村との意見交換等の開催件数	2	2	4	13	3	16	5	8
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	5	3	6	7	6	6	3	4
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	3	4	0	0	0	0	0	1
企業等への訪問件数	17	31	44	35	20	18	22	18
関係団体等との意見交換等の開催件数	11	12	25	29	25	38	24	29

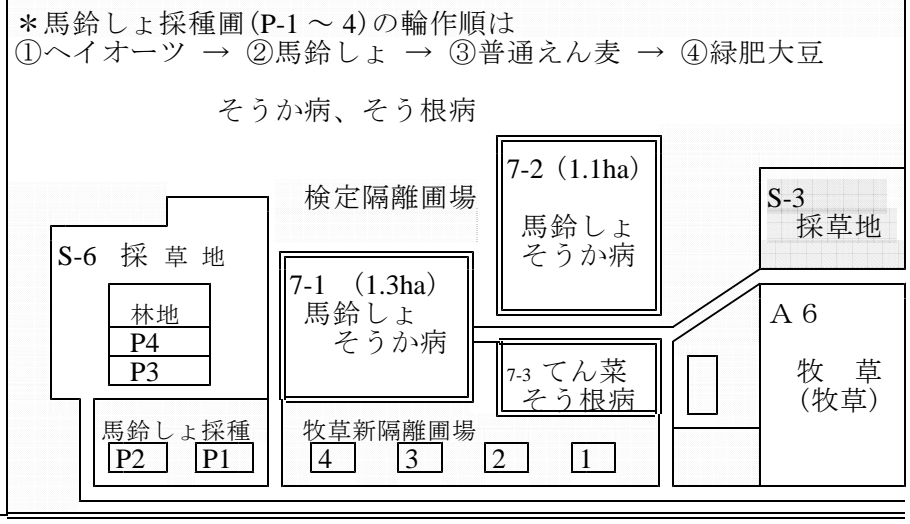
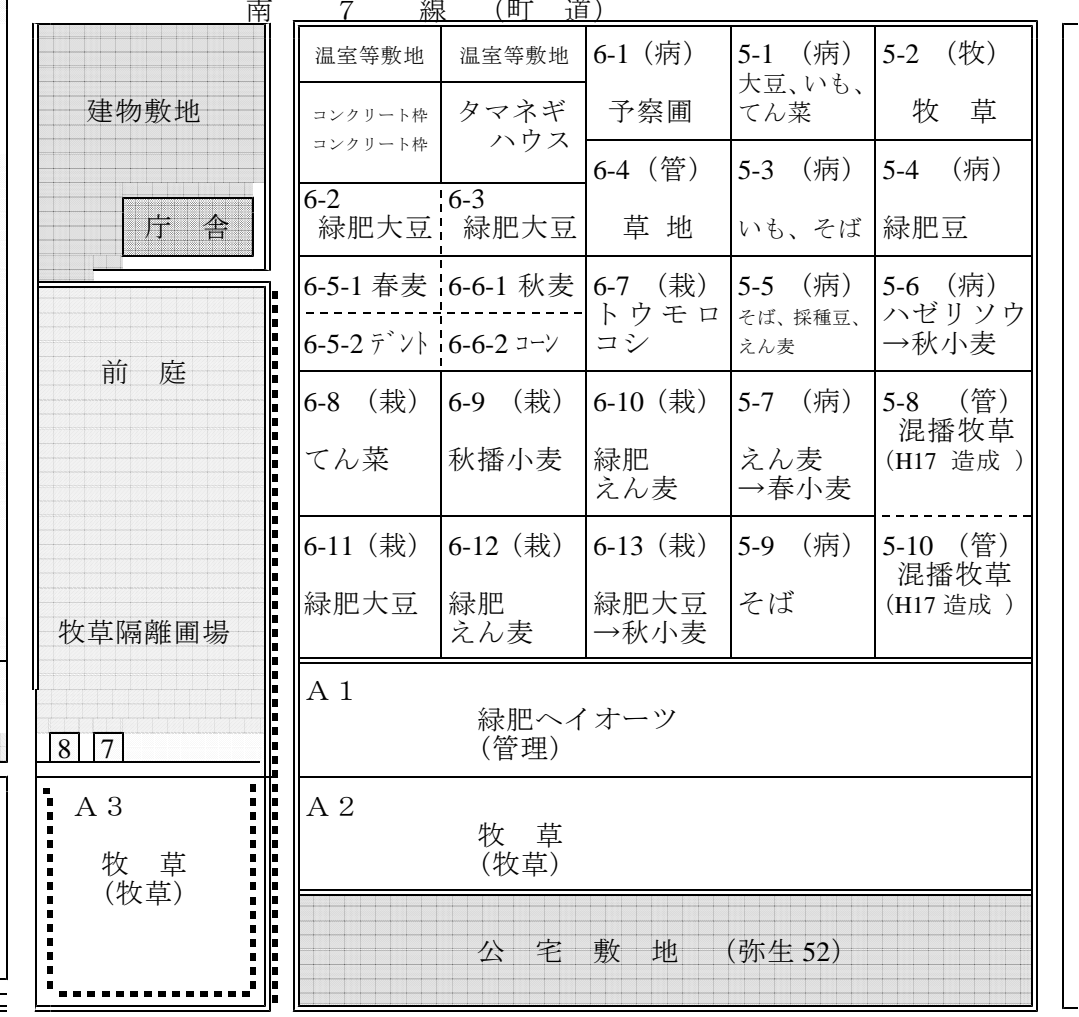
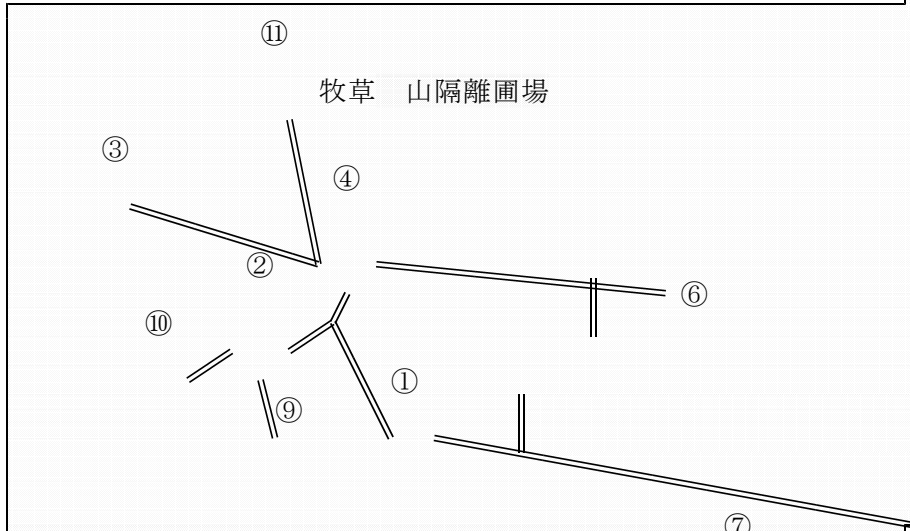
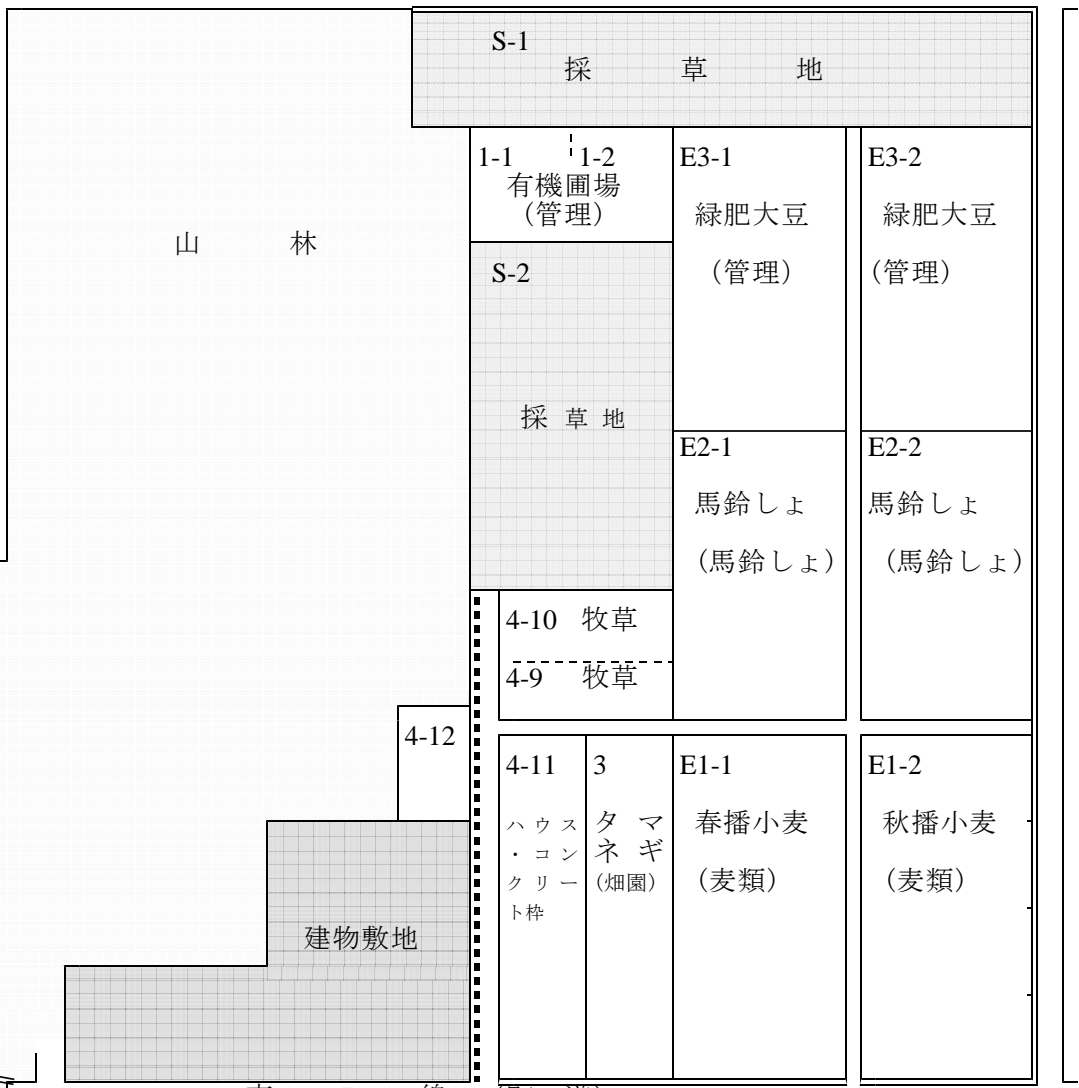
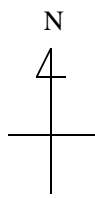
6 北見農業試験場建物配置図

土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地



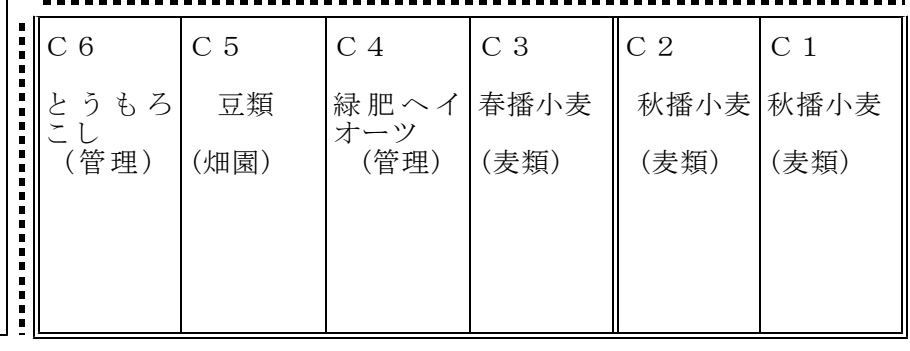
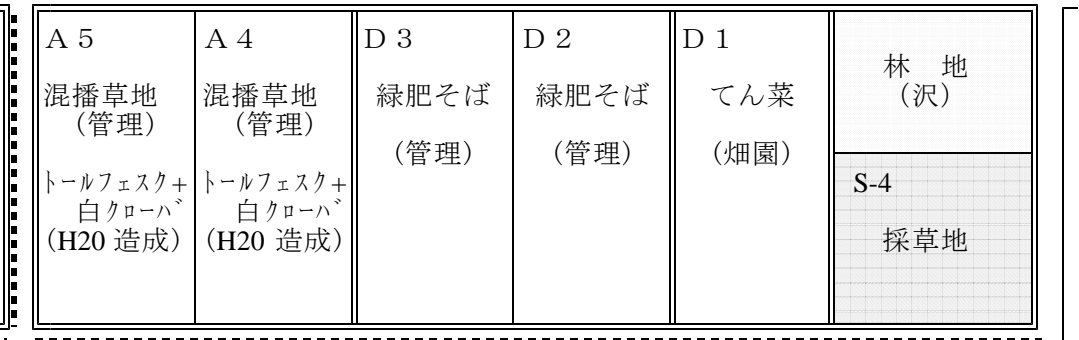
7 平成29年度圃場配置図

H29.4.28 作成
業務委員会事務局差作成



*馬鈴しょ採種圃(P-1～4)の輪作順は
①ヘイオーツ → ②馬鈴しょ → ③普通えん麦 → ④緑肥大豆

至置戸 南 8 線 (道 道) 正門 至北見



旧ふるさと銀河線

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 平成29年度

平成30年6月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
